
ぼくとFクラスと召喚獣

神龍彌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくとFクラスと召喚獣

【NZコード】

N3049W

【作者名】

神龍シ

【あらすじ】

文月学園に通うことになった主人公【影月 久遠】は、Fクラスに入ることになった。

文月学園には、幼馴染の木下優子、木下秀吉がいた。
この学校で久遠がどのような動きを見せるのか

この作品は不定期更新です

キャラ設定+追記

影月 カゲツキ
久遠 クオノ

(男)

身長 178cm 体重57kg

赤髪 赤眼

趣味 音楽鑑賞 ギター 野球

得意科目 日本史 世界史 英語W

苦手科目 生物

日本史と世界史は700点オーバー 英語と化学は400越えるか
こえないぐらい 後は、320ちょっと。

総合科目 4000点越えるか越えないくらい

Fクラス所属

振り分け試験を受けていないのでFクラス

木下姉妹と知り合いで、小学校4年生の時に北海道に引っ越し。
高校2年生になって帰ってきた。時間帯は、Dクラス戦が終わって、
Bクラスに宣戦布告する日に転校してきた。
模擬刀を持している。

FFF団を10分以内で倒すことができる
よっぽどのことではないと怒らないが、怒つたら口調が変わったり、
その相手なら容赦がなくなる。

召喚獣

デフォルト 本人を小さくしたようなもの

武器 太刀 サブマシンガン

服装 軍人の感じ

腕輪 雷一閃

効果 雷を宿した太刀で敵を切り裂く

消費点数 40点

広範囲の場合 4体で150点

キャラ設定 + 追記（後書き）

不定期更新ですが暖かく見守ってくれると嬉しいです

予習問題 プロローグ

「優ちゃん、秀くん。」

僕は、双子の姉弟に言わなければいけないことがあった。

「「どうしたの（じや）久遠くん？」

一人は不思議そうに僕の顔を覗いてきた

「僕ね、来週から北海道に行くことになったの」

「え？」

「だからね、少しの間お別れになっちゃんだ」

秀くんは泣きだしていたが、姉の優ちゃんは、いまにも、泣き出しそうな顔で話していく

「久遠くん？」

「どうしたの？優ちゃん」

「いつぐらいまで、あっちにいるの？」

「わかんないよ。でも、絶対、帰つてくるからね！」

「絶対だよ？」

「うん、絶対にわすれない。優ちゃん、これ持つてくれない？」

「これは？」

「僕の宝物のハーモニカ。帰つてきたら秀くんと一緒にこれを渡してくれないかな？」

「分かつた。秀吉もわかつた？」

「うん、わかつたのじや」

秀くんは泣きながら返事をしてくれた

そして一週間後

「僕、そろそろ行くね。そのハーモニカ頼んだよ？優ちゃん、秀く
ん」

「絶対帰つてきてよ。それまでこれを大切にするから！」

「向こうでもがんばるんじゃぞ？久遠くんなら大丈夫だと思つが」

「うん！」

それじゃ、時間だから行くね？

バイバイ

「絶対、帰つてきてよー。」

「分かったーー！」

僕と優ちゃんと秀くんの少しのよひで長い別れ

第一問

僕は、予定より少し遅れたけど日本に帰ってきた
「久しぶりだな～」

「ホントね、あの子たち元気にしてるかしら？」

僕に話してきたのは母さん

僕は、小さい時に父さんを亡くし、母子家庭だった。
母さんは一人で、僕を育ててくれて、それでもって仕事をこなして
いたから、僕は母さんを凄く尊敬してるけど、母さんの前じゃ恥ず
かしくて言えないよね

今年の母の日、何あげよっかな～

「ここか～ 案外大きいね一人じゃ少し広くない？」

「なに言つてるの？ 優子ちゃんと秀吉くんが来たりするじゃないの
？」

「まあ、そうだね」

「長旅で疲れたでしょ？ 明日学校だから寝なさいよ？」

「うん、わかった

それじゃ、寝るね おやすみ～

「はい、おやすみなさい～」

僕は、疲れで布団に入るとなすすべく眠りに着くことができた

翌日

「ふあ～、おはよう母さん。」

「おはよう、久遠、手続きとかあるから早めでなさいよ～。」

「うん、分かった

いい天気だね

僕は、新しい学校生活を想像しながら登校していた。

学校が見えるとものすゞく『漢』とゆう漢字が似合にそつな男性が立っていた。

「ん？お前が影月か？」

「僕が、影月 久遠ですよろしくおねがいします。ええーっと・・・」

「西村だ西村宗一」

「はい、宜しくお願ひします西村先生」

「お前は、振り分け試験を受けてなくてFクラスだがいいのか？」

「と、いいますと？」

「バカの集まりだ、お前の成績ならAかBにはいけるぞ？」

「別に、いいですよ、たのしく学園生活が送れそうじゃないですか？」

「お前がそうゆうのなら構わない

「職員室に行くぞ」

「はい」

僕は、担任の福原 慎先生（さつきじゆく紹介を済ました）に案内されながら、Fクラスに着いた

「では、少しまつていてください」

「はい」

僕はドキドキしていた転校は慣れないものだね！
教室内

「ええ、みなさんにお知らせがあります

転校生がいます」

『何――? それは男ですか女ですか』

「男です」

『『『男かよ！』』』

「では、入ってきてください」

久遠 side

色々な叫び声が聞こえてきた
びっくりしたなあ

「では、入ってきてください」
よし、頑張るよ！

僕の高校生活！！

僕は、古い扉を開けて入つて行った

チョークを持ち、名前を書いて振り向いて

「僕は、影月 久遠です。趣味は音楽鑑賞と料理です。宜しくお願
いします」

僕は、あたりを見渡し知ってる顔があつた
少し動搖したけど

「あ、久しぶり秀くん。やつと帰つてこれたよ

「お主、や、やっぱりあの久遠かの？」

「そうだよ、6年前にわかれた久遠だよ」

僕は、そう言つと、秀くんが泣きながら抱きついてきた。
「ずっとずっとあいたかったのじやあ

「そうじや、今から、姉上の所に行かなければ！いくぞ久遠ー！」

「ちょ、ちょっとまつて秀くん。優ちゃんもいるの？」

「あたりまえじゃ！」

「へえ、優ちゃんもいるのか早く会いたいな

いいこと考えた！！

「秀くん、ぼくに考えがあるから、昼休みにしない？」

「むう、久遠がそう言つのならば構わんが

『諸君。こじはどこだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『死の鉄槌を!』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより 2-1 F異端審問会を開催する!』

『罪状を読みたまえ』

ちよつとまつて、感動の再会邪魔しないで。てゆうか、その覆面怖いよー。

『は。須川会長』

『えー、被告、影月 久遠（以下この者を甲とする）は我が文月学園第一学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は背信行為、および第三の性別『秀吉』といちやいぢやしてしまった今後、甲とその『秀吉』の関係に対しても充分な調査を行つた後、甲に然るべき対応を……』

『御託はいい。結論だけ述べたまえ。』

『イチヤイチヤしていたので羨ましいであります!』

『うむ。実にわかりやすい報告だ。』

『ええ！？秀吉男でしょ！？』

『第三の性別つて何！？』

『つるさい、お前には制裁を加えてやろ!』

『仕方ない、本氣を出すよ』

10分後、屍が山積みになつていた。

第一問

今は昼休み、僕は力バンから弁当を取りだしたところに

赤髪でツンツン頭で筋肉が引き締まっている男子に声をかけられた

「おい、影月」

「ん? なんか用? ええと」

「悪い、俺はFっこの代表の坂本 雄一だ。代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。」

「それじゃ、雄一でいい?」

「ああ、じゃあ俺も、久遠って呼ぶ」

「うん、いいよ。で、ぼくに何か用?」

「ああ、俺たちと昼飯くわねえか?」

「いいよ、でも食べ終わったら、すぐ出て行つていい?」

「どうしてだ?」

「うう、この空氣いやだな」

「Aクラスに用事があるからね」

「久遠は、姉上に会いに行くから行かしてあげてほしいのじや」

「そつか、分かった。よし、久遠、時間も少ないしちょい急ぎ足で行くか?」

「うん!」

雄一の後についていくと先客が4人いた。

その人たちも、秀くんと雄一とは仲がいいよつで、自己紹介をしてもらつた。

そして、昼食を食べ終わると、秀くんと一緒にAクラスに行つた

「久遠、わしさここまでじや、じやから、後は頑張るのじや」

「あはは、秀くん頑張れって大袈裟だよ。」

「じゃ、行つてくるね」

「うむ。」

教室のドアを開けるとボーアイッシュな女の子に声をかけた

「あ、そこの人、ちょっとといい？」

「ん？ ボクに、なんか用？」

「木下優子さんどこかな？」

「優子と知り合い？」

「えっと、昔、転校して、戻ってきたから挨拶を

「へえ、じゃ、じつちにきてー！」

それで、どうやつて優ちゃんを驚かすかな？

あ、秀くんもドアから覗いてる

ちょっと、にやけてるのがむかつくな

あ、いたいた。

勉強してるのかな？

「木下優子さんちょっと話があるんだけどいいかな？」

「ちょっと待つて、今、忙しいから。」

「へえ、そーゆー」と呟つんだ。せつかく6年ぶりの再会なのに

「それ、どうゆう……こ……み？」

優ちゃんは勢いよく首を上げてほくの顔みて驚いている

「く・・・・おん？」

「や、帰つてきたよ」

優ちゃんは泣きだし

「やつと、やつと帰つてきた。連絡、うごこよ」してよ、久遠

「『めんね、驚かしたかったから・・・!...?』

ぼぐが言つ終わると同時に優ちゃんが抱きつってきた

第一問（後書き）

誤字脱字感想などがあつましたら書いてください

第三問

夜になり、ぼくは木下家の前に来ていた。

ピンポーン

「はーい、どちら様ですか?」

「影月ですけどー」

「あ、久遠来たんだ、今開けるから待つてて」

「うん」

廊下が走る音がして、玄関のドアが開いた

「久遠、上がつて」

「ありがとー」

久しぶりの木下家は、心地よいものだった

「おお、久遠来たのじゃな」

「うん、優ちゃんととの約束だからね」

「母上、久遠が来たのじゃ！」

「え？ ホント？ あ、久遠ちゃん久しぶりね～」

「お久しぶりです」

優ちゃんと秀くんのお母さんはまだ若かった
(全然、変わってないな～)

「秀吉、あれ持つてきた?」
「あ、忘れたのじゃ、今すぐ取つてくるのじゃ」

「もう、しつかりしなさいよね」

「面田ないのじゃ」

秀くんがそう言い、階段を上つていく

「ちょっとまつてて」

「何があるの？」

「それは言えないわね」

「姉上、ちょっと来てほしいのじゃ～」

秀くんは一階から優ちゃんに声をかける

「分かった、すぐ行く」

優ちゃんも2階に上がった

「久遠」

2人の声が重なる

「どうしたの？」

ぼくは、後ろを振り向くと

「おかえり（なのじゃ）」

そこには、ぼくの宝物の『ハーモニカ』があつた。

「うん、ただいま」

ぼくは、受け取りながら涙を流した

「どうしたのじゃー？」

「うん、嬉しくてついね。

これを、ふたりに預けといてよかつたよ、ホントに

ぼくは涙を拭きながら言つた

「ねえ、久遠、久しぶりにそれを聞かしてくれない？」

「うん、それじゃ言うものの場所にいこつか」

いつもの場所とゆうのは
木下家のベランダである

久遠 side

ぼくは、優ちゃんと秀くんと一緒にベランダの上にいた
ぼくは、久しぶりにハーモニカを吹き始めた

懐かしい感覺

ハーモニカがぼくをずっと待つてくれたような気がした

吹き終わると優ちゃんがぼくの肩の上に頭を乗せ眠っていた

久遠 side out

優子 side

アタシと秀吉は久遠が帰ってきたことに喜び、久遠から預かつてた
ハーモニカを渡し、1曲聞くことになった。

久遠は、吹き始めると、目を閉じ、ハーモニカに溶けん込んでいった。

メロディーは優しく温かくそれで懐かしい音色だった

アタシは心地がよく吹いている久遠に身を預けるように意識を飛ばした

優子 side out

「優ちゃん、寝ちゃったね」

「そうじゃの、久しぶりにお主のハーモニカが聞けて、嬉しかった
んじやる」

「やうだつたのかな、やうだつたから嬉しいな

「つむ、そうじゅるな」

「じゃあ、ぼくは優ちゃんをベッドに寝かせてくるね

「わかったの、じゅ

ぼくは優ちゃんを抱えベランダを後にし、優ちゃんの部屋に入った
のだが

「…………この、荒れようは向？」

「ぼくは、そうつぶせき優ちゃんをベッドに寝かせた

「うう、久遠……おか……えり」

優ちゃんの寝言が聞こえた

「ただいま」

とぼくは言

額にキスをした

第三問（後書き）

次は、Bクラス戦に入ろうと思います
駄文ですがよろしくお願いします

第四問 開戦Bクラス！！

「さて皆、総合科目テスト」苦労だった」

教壇に立つた雄一が机に手を置いて皆の方を向いていいる。

今日は午前中がテストで、さつき全科目が終わり、昼飯を取つたところだ。

「午後はBクラスとの試合戦争に入れる予定だが、殺るときは充分か？」

『おおーっ！』『おおーっ！』

一向に下がらないモチベーション。他のクラスはない、唯一の武器だらう。

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取つてもうつ。野郎共、きつちり死んで来い！」

『うおおーっ！』『うおおーっ！』

姫路さんと戦える」とで、更に士気を増すFクラスの人たち。

ぼくも、初参戦だしやる氣出さないとね

「影月君、どうしたんですかうれしそうですけど」

「やつと、戦争ができるからね。楽しみなんだ～」

「そりなんですか、がんばりましょ～うね」

「そりだね！」

昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

Bクラス戦の開始。

「よし、 いつて来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『 サー、 イエッサー！ 』『 』

ぼくは、 先陣を切り走り出す。

「いたよ、 Bクラス！」

「高橋先生を連れてるぞ！」

人数は10人ほどが皆と協力するとして、 ぼくは3人ほど倒したい
な

「生かして帰すなっ！」

物騒な台詞を吐き捨てながらBクラス戦が開戦した。

「Bクラス里井に物理で勝負を挑みます！」

『 Bクラス 里井真由子 V S Fクラス 影月 久遠 』

152点

VS

330点

』

「里井、 僕も参戦するぜ」

『 Bクラス 野中長男

140点』

「行くわよ！！」

里井さんが突っ込んできて、 それを刀カードして、 片手でサブマシンガンを打ちこんだ

『 里井真由子 0点』

「戦死者は補習！！」

西村先生が登場し、里井さんを連れて行つた
ぼくは、びっくりして少し固まつたけど、それ以上にかたまつてい
た野中の召喚獣の首を飛ばした。

「野中長男 0点」

野中も連れて行かれた

「明久、コツとかないの？」

「うーん、感覚？」

「もういい、聞いたぼくがバカだつたよ」

「ひどい！？」

姫路さんも奮戦して、Bクラスの動搖を誘つことに成功。

「久遠、明久、ワシらは一旦、教室にもどるぞ」

「ん？ なんで？」

「ぼくも、そう思う。

「Bクラスの代表じゃが・・・」

「うん」

「あの根本らしい」

「根本って、あの根本恭一？」

「根本つてだれ？」

明久曰く、

テストではカソニングが当たり前

目的のためには手段を選ばず、球技大会で『一服盛つたらしい』
喧嘩には、ナイフが通常装備

らしい

「確かに、卑怯だね。」

「これなら、なにかあつてもおかしくはないね」

「つむ、それでは戻るとするかの」

教室に戻るとそこにはひどい惨状だった・・・
折れたシャーペン、粉々の消しゴム、そして六だらけの卓袱台

雄一も戻ってきて、Bクラスとの協定の話にぼくは疑問を感じた
「雄一、戦争に関わることって、作戦会議とかも入るの? はいった
らまずくない?」

「つーー、やうやくことか」

「え? 何どうゆう?」と?」

「明久、ここはどうだ?」

「どうして、ここは学校だよ?」

「それじゃあ、学校とは、何をすると?」だ?

「もちろん、勉強・・・ってそういうことかー。」

「やつと、分かつたんだ」

ぼくらは、戦線に戻り戦った

そして休戦の時間になり教室に戻った

「・・・・・(チヨンチヨン)」

「お、ムツツリー二か」

「・・・・・・・・・クラスの動きが怪しい」

「漁夫の利を狙つつもりだね、いやらしいよ」

「雄一どうするの?」

「協定の事もあるけど・・・」

「雄一どうするの?」

「とりあえず、Cクラスに不可侵条約を結びに行くか

「雄一がそれでいいならいいよ」

「うむ、それでは行くとするかの」

「秀吉は、ここに残つてくれ

「ん? なんじや? わしは行かなくて良いのか?」

「お前の顔を見せると万が一やううとしている作戦に支障が出るのでな」

「よくわからんが、雄一がそういうのなら従おう」

（秀くんの顔を見せてくなくて、作戦? つてまさか・・・）

「おい、久遠おいてぐぞ~」

「あ、まつて今行くから~」

ぼくが考え方をしてるうちに、島田さんと須川増えて、Cクラスまで来た

「Fクラス代表の坂本だ。」この代表はいるか? 「

「私だけど、何か用かしら?」

「不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・どうしようか? 根本君?..」

まじか!?

「当然却下。だつて必要ないだろ?」

「なつ! ? どうして根本君がここに! ?」

奥から、現れたのは、卑怯者の根本らしい

「とりあえず、雄一は逃げて! 」私はぼくと明久で何とかするから
! ! !

「すまねえな恩に着る」

「明久、準備はいい?」

「いつでもいいよ。」

「じゃ、死地にいこつか!」

「うん!ー!」

ぼくと明久のタッグ戦が始まつた

第五問

ぼくと明久対Bクラス10名

「Fクラス影月がここにいる10人に挑みます！」『試験召喚』

影月久遠 数学 450点 吉井明久 数学63点

「今日は今までにないくらい良かつたからねーさあ、かかつてきな

よー！」

「なめやがつて！『試験召喚』『サモン』

Bクラス合計 1200 点

ぼくは、目を瞑った

「はっ！怖気づいたか！？」

「雷一閃！！」

ぼくが、目を開けると同時に、4体の召喚獣が消えた

その瞬間に根本がにげたけど、ぼくと明久ですべて撃退した

「明久、教室に戻ろう・・・か？」

ぼくは、極度に集中力を使いそのまま倒れてしまった

「あれ？知らない天井」
「保健室よ」

「あれ？なんで優ちゃんがいるの？」

「秀吉が教えてくれたのよ」

「そつか、ごめんね心配かけちゃって・・・」

「別に、いいわよ。それより大丈夫？」

「うん、もう平気」

「そ、そつか（あの笑顔は卑怯なのよー）／＼／＼

外に出ると、もう夜になつていて優ちゃんを家まで送り、家に帰つた

次の日

「おはよー」

「おはよー、久遠もう大丈夫なの？」

「うん、ヘーキヘーキ心配かけてごめんね？」

「いいよ、別にー」

結局、今日に持ち越しになり、朝から戦争だ

「昨日言つてた、作戦を実行する」

「雄二は開口一番に言つた。

「作戦？まだ、開戦時間じゃないよ？」

明久は疑問を素直にぶつけるけど、ぼくは、ある程度は予測できていた

「Bクラスじやない、相手はCクラスだ」

「なるほど、で、何すんの？」

「秀吉にはこいつを着てもらひ

ぼくの予測が確信に変わった時であつた
でもさ、雄二、どうやって手に入れたの？

それを持つてるだけで軽く引いたよ

「それは、別にかまわんが、ワシが女装して、どうするのじゃ？」

構おうよ秀くん、もしかしたら、命がなくなるかもしないんだよ？」

「秀吉には、木下優子として、Aクラスの使者を装つてもらひ
とゆうわけで用意してくれ」

「う、うむ・・・・」

「秀くん、やりすぎたら、ダメだからね？」

「ハツハツハ、任しておれ。」

不安にいっぱいで仕方ないのですが・・・

そんなこんなでCクラス前

「JINからは、秀吉、一人で頼むぞ」

「気が進まんのう・・・・」

秀くんはなんか嫌そうな顔をしていた

Cクラスの前で大きく深呼吸
勢いよく扉を開けて・・・

『静かにしなさい、この薄汚い豚共！』

終わった、秀くんが死ぬ・・・

『な、何よアンタ！』

『話しかけないで、豚臭いわ！』

矛盾してる気がしますが・・・

突つ込んだら負けだよね・・・

ハウ・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数がいいからつていい気になるんじやないわよ！なんの用よ！』

代表さんが単純のバカで短期で助かつた

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なつ！？言うに事欠いて私達はFクラスがお似合いですつて！？』

Fクラスは豚小屋じやない！

『手が穢れてしまうのは本当は嫌だけど、特別にあなた達のを相応しい教室に送つてあげようと思うの

ちょうど、試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達に始末してあげるから！』

秀くんはドアを閉めて帰つてくるけど、ものすゝくすつきりしたようだった

「ドアと壁をつまみ使うんじやー戦線を拡大させるでないぞー！」
秀くんの指示が飛ぶ

雄一は『教室に閉じ込める』と言つた

でも、姫路さんの様子がおかしい

本来は総司令官である彼女、でも、全く役割を果たしていない

明久が、姫路さんに話しかけるけど『何もないです』の一点張り

「右側入口数学から、現国に変更されました」

「数学はどうした!」

「Bクラスに拉致られて模様」

右側では大きく揺らいだ!

「わ、私が行きます!」

姫路さんが駆け出した。が、すぐに立ち止まつた
視線の先には、根本くんのてにある手紙

そうか、そうゆうことか・・・

完璧にオレ（・・）を怒らしたな、根本！

明久は、姫路に休めと言い、教室に戻り、オレはその後を追う
「おい、明久、待てオレも行く」

「えつ！？、久遠なんか全然雰囲気が違うんだけどー！」

「んな事はかんけねえ」

「で、どうすんだ？」

「根本のやるーをふつ飛ばす！－」

「その息だ明久、オレを怒らしたこと後悔させてやるーー。」

第五問（後書き）

久遠の口調を少し変えてみました。

第六回 戦争終結

「「雄一」」「
「ん? どうした? 脱走か? そなうならチヨキドシバクぞ」
「冗談はいい、話を聞け」
「久遠がその態度だと何かあつたのか?」
「ああ、姫路を戦線から外せ、理由は明久に言わす」
「明久言ってみる。」
「根本君の着てる制服が欲しいんだ」
「お前にいつたい何があつたんだ?」
「お前、ホントバカだな」
「ああ、いやえっとその・・・」
知らなかつた、ここまでバカだとわ・・・
「まあ、いいだらう勝利の曉にはそれくらい何とかしてやるわ」
いいのかよ!」
「で、姫路を外す理由は? どうしてもじやないといけないか?」
「うん、理由は言えないけど・・・」
「雄一、頼むオレからもお願ひだ」
「わかつた・・・ただし条件がある?」
「・・・条件?」
「姫路が担う予定だつた任務をお前がやれ。どうやってもいいから
なず成功させる」
「やつてみせる! いや、やつてやる!」
「良い返事だ、で久遠お前は・・・「わかつてゐ、死ぬ氣で止めろ
だろ?」
「ああ」

「大丈夫さ、あいつにはオレを久しぶりに怒らしたからなボコボコにやつてやる」

「明久」

「どうしたの、雄一？」

「お前はたしかに点数は低い。でもな秀吉やムツツローーーのように、お前にも秀てている部分がある。だからお前を信頼している」

「・・・雄一」

「つまくやれ、計画に変更はない」

歩きながら、明久は考えていたが、閃いた顔をしていた。

オレはこの時勝つ確信が湧くのであった。

「秀吉、大丈夫か？」

「ぐ、久遠？ お主、きれであるのか？」

「ああ、今まで以上に最高にきれてるさ。おかげで根本のくそやう一をぶつ倒すことができそうだからな」

「・・・無茶はするでないぞ」

「わかつてゐや」

わしは、久遠の雰囲気、口調があの時とまったく一緒だったときに少し怖かつたが、まだ、平常心を少し残つてあるみたいで安心した

この勝負なんとしても勝たねば！

Side out

雄二と根本のやり取りを見ながら、戦闘に入った俺は現国で戦闘に入つた。今回は350点だが、相手もあいてで多い

雄二の作戦決行の合図の時には100点を切つていた。

Bクラスが押し出そうとするが、明久の奇襲それを守る近衛兵に阻まれるが、今度はムツツリーの奇襲、保健体育の勝負でムツツリ一が勝ち、Bクラス戦は終了した。

「秀吉、教室に戻るぞ」

「どうしたのじゃ？」

「いいから、早くしろ」

秀吉を急かし、Fクラスに着いた

「秀吉のこと誰にも言ひつな」

「なんの事じや？」

「今から、少しの間氣を失うが寝てるとだけ言ひてくれ

「な、なぜ氣を失うのじゃ！？」

「俺にもわからん・・・ねえ・・・・・・・

オレを氣を失つた

ぼくが田を覚ますと優ちゃんの顔があつた

「え？ なんで優ちゃんがいるの…？」

「あんたは、戦争」とに氣絶しないと、気が済まないの？」

「なんで、知ってるの！？」

「秀吉にはかしたの」

「めんぼくない」

あれ？ こじクラスじゃない

「ねえ、こじどこ？」

「私の家だけど？」

「どうしてこじて？」

「坂本くんが運んでくれた」

「まじ？」

「まじ」

「そ、それじゃ、ぼく帰るね」

ガツ（優ちゃんがぼくの肩をつかむ音）

「何か言つことは？」

「すみませんでしたー！！」

土下座までの時間 0 ~ 5秒

もはや人間業じゃない

「まあいいけど、『ご飯食べて行く？』

「母さんに電話しないと・・・」

「もうしといた」

「食べるのほんと確定なんですね」

「 もう少し」と

ぼくは木下家で『』飯食べて帰り
風呂に入つてそのまま布団で眠つた

第六問 戦争終結（後書き）

グダグダですみません

第七問 久遠Aクラスに赴く

Bクラス戦翌日

「まずは躊躇に礼を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこなしたのは、他でもない皆の協力があつての事だ。感謝している」

「ゆ、雄二」、どうしたのさ。らしくないよ？」

ぼくも、そう思うよ

明日は嵐かな？

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」「まだ、早いんじゃない？Aクラス戦があるからね？」

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないと、現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

雄二の宣言で、Fクラス全員が歓声を上げた。

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃないんだーっ！」

Dクラス、Bクラス相手に勝利した自信が、彼らを奮起させていた。全ては雄二のシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助

長々としている。

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

ぼく達は既に聞かされてたけど、Fクラスのみんなには言つてないから驚いてる

「どういう事だ？」

「誰と誰が一騎打ちするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

当然、いきなりこんなことを言われれば、動搖するのも無理もない。だが雄一はそれに構わず、机をたたいて皆を鎮める。

「落ち着いてくれ、それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」

「バカな雄一が勝てるわけがあああ！！！」

雄一の投げたカッター明久の頬をかすめた。

「次は耳だ」

どうやつて、この人たち友達やつてんだろう

謎だね！

「……まあ、その通りだ。まともにやり合えば勝ち目はないかもしないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろう？　まともにやり合えば、俺たちに勝ち目はなかつた。今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さん見せてやる！」

「　「　「おおおお――――――」」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で雌雄を決する物である。

だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「でも同点だつたら、きっと延長戦だよ？ そうなつたら問題のレベルも上げられちゃうだろ？ し、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切つたやり方を作戦などといふものか」

「雄二何かあるんでしょ？ 早く言ひてあげなよ」

「分かつてる。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知つているからだ」

確實に間違える問題。

それを聞いて、全員が静まつた。

「その問題は……“大化の革新”！」

「大化の革新？ 誰が何をやつたみたいな問題、小学生でやつたか？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問う問題だ、その問題が出たら俺たちの勝ちだ

明久、いつおこったか知ってるか？」

「なくようぐいすだから7・9・4年だね」

「ぼく、明久がここまで、バカだとは思わなかつたよ・・・」

「ああ、オレも想像を越えてびっくりした」

「え、違うの？」

「違う！ 無事故の革新だから6・4・5年だ！」

だが、翔子はお前が今言つた年号に絶対に間違える！ これは確實だ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！ はれてこの教室とはおさらばだつて寸法だ！

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。
そう結論付けるには、十分な自信を持つ雄一の姿だった。

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ、姫路？」

「霧島さんとは、仲が良いんですね？」

それを聞いて、明久は訝しげに雄一を見た

「ああ、オレと翔子は幼馴染だ」

「総員ねらえーーー！」

Fクラス男子全員（ぼくと秀吉は除く）は上履きを持っていた

「なっ！？ 何故明久の号令で急に構える！？」

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様を殺すーーー！」

「俺が何をしたと！？」

「雄一、この人たちに理屈は通じないよ？」

明久は、「あの、吉井君？」

「ん？ 何、姫路さん？」

「吉井君は、木下さんや霧島さんが、好みなんですか？」

「そりや、まあ。美人だし……えつ、どうして姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？ それと島田さん、どうして君は僕に向かつてなんて危険な物を投げようとしてるの…？」とゆう状況

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは一度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は……」

「「「システムデスクだ！」」

その傍らでは、テンションは最高潮だった。

「今から宣戦布告に行くぞ、ムツツリーー」と秀吉も用意しろ

「了解」

「わかったのじゃ」

Aクラスへしゅっぽーつ

第七問 久遠Aクラスに赴く（後書き）

誤字脱字感想等ありましたら書いてください

第八問 賭け！？（前書き）

木曜日から更新が遅れるかも知れません

第八問 賭け！？

「一騎打ち？」

「ああ、そうだ。FクラスはAクラス代表に一騎打ちを申し込む。
雄一はもちろん明久に秀君など首脳陣が来ていた。

「何が目的？」

優等生の皮をかぶっている優ちゃん。

（ギロツ！）

すみませんでした！！

「もちろん、オレ達Fクラスの勝利だ」

優ちゃんが怪しむも当たり前だよね

なんせ、最下位クラスがAクラス代表に一騎打ちを申し込んでるから。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい
けどね、だからと言つてわざわざリスクを犯す必要は無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって。。昨日来ていたあの

昨日何があったの！？」

「ああ。アレが代表をやつているクラスだ。幸い戦線布告はまださ
れていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間

を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

試召戦争の決まりである、準備期間。

「知つていろだろ？ 実情はビリあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなつているつてことを。規約には何の問題もない Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」
「へえ、Dクラスにも勝つたんだ……」
「雄一って戦争好きだね～どうでもいいけど」
「・・・・それって脅迫？」
「いや、ただのお願いだよ」
「いや、ただのお願いだよ」
「優ちゃん、頑固だから長引くね、これ
また睨まれた・・・」
「なんでわかるんだろう？」
「何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」
「代表同士の対決だったら雄一に勝ち田があるとは思えないだろうからね」
「え？ 本当？」
「あまりにあつさり決まつたからか、明久が驚いて声をあげた。
「だつて、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん」
「だから、昨日なにがあつたの！？」
「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝つた方の勝ち、つていうのなら受けてもいいよ」
「う」
やはり警戒されている

「なるほど。こちから姫路か久遠が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思つけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶調だつたら、問題次第では万が一があるかもしれないし、久遠相手だと日本史や世界史どうなるかわからないからね」

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

一騎打ち五回か　。結構いけそうだね。

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハントはあつてもいいはずだ」

「え？ うーん」

さすがに戦争の勝ち負けが係わってくる内容なだけに悩んでいるようだ。

「受けてもいい」

「「うわっ！」」

びっくりした！

「　雄一の提案を受けてもいい」

「あれ？ 代表。いいの？」

「　その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「・・・・・うん」

霧島さんはなぜか雄一を見た後、姫路さんを見て再び雄一を見る

「・・・・・負けた方は何でも一つ　言うことを聞く」

後ろで明久とマシューがなにかやつてたけど放つておひつ・・・

「じゃ、ひつしよつ？ 勝負内容は五つの内三つそつちに決めさせ
あげる。」 ひつちで決めさせへ？」

「ああいこせ交渉成立だ」

「あ、あひじ何勝手に決めてるのやー。姫路さんがあ」 承してないじゃ
ないか！」

「大丈夫だ。姫路には迷惑はかけない」

「えつ？ それひつしよつ？」 とへ」

「さて、帰るだ~」

「無視！？」

明久を放つておこして田舎者とあるナビ、優ちゃんに声をかけられた

「久遠」

「どうしたの？」

「えつと、賭けをしましょ」

「どんな賭け？」

「アタシとあんたが戦つて、勝った方がなんでもいいと有利かせ
る」

「うん、いこけど、ひつしたの急に？」

「べ、別にいこじやない／＼」

「うそ、わかつた。それじやーね~」

教室を出ると、絶対負けないーと聞こえたような気がした
さて、氣を引き締めますか！

第八問 賭け！？（後書き）

誤字脱字感想等がありましたら言ってください

第九問

「では、両者準備はよろしいでしょうか？」

Aクラスの担任高橋先生が立会人である

「ああ」

「…………問題ない」

「それでは、一人目の方どうぞ」

高橋先生の声で雄一は明久に「本気を出してみる」と言い、明久は「わかったよ」と答え前に出た

Aクラスからは佐藤さんが出てきて、ノリがいいのか素なのかわからなかつたけど、Fクラスのバカ騒ぎにのり、明久の「左利きなんだ」とゆう訳のわからない言葉で開戦となり、瞬殺でやられた。そのあと、島田さんに「利き腕は関係ないでしょ！」と言われながら関節技を決められていた

2人目は、ムツツリーと工藤さん

「きみ、保健体育が得意なんだって？」

「ボクも得意なんだよそれも君と違つて…………実技でね」

「…………（ブシャー――――）」

「そつちのキミ、吉井君だつけ？勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

「優子の幼馴染の影月君だっけ？」

「そうだけど……」

「保健体育の授業やらない?もちろん実技でね」

「く~お~ん!~!」

「ちょっと待って優ちゃん!」

「ぼくの関節はそっちに曲がら……ギャアアアアアア!~!」

「・・・・・優子、やり過ぎ」

「へ?あ、「メンタ遠!」

「うう、大丈夫だよ」

「早く始めてください」

「はーい試験召喚^{サモン}つと」

「・・・・・試験召喚^{サモン}」

勝負は一瞬だった

『工藤愛子 VS 土屋康太

426点

□

526点

51

△ツツリー二ヤバいね(笑)

3人目は実質学年次席対決

姫路さんが霧島さんと並ぶような点数で久保を圧倒した!

「4人目来てください」

「ワシが行こう」

「いや、ぼくが行くよ」

「むつ、そとかなら譲るつ」

「ありがと」

「その前に、秀吉ちよつといい?」

フルブル

ぼくは震えていた

優ちゃんと秀くんが出て行ったあと

秀くんの叫び声が・・・

そのあと、帰り血を拭きながら優ちゃんが帰ってきた

「秀吉は急用ができたから帰るってさ
あ、始めましょ」

「教科は何にしますか?」

「優ちゃんが決めていいよ」

「そう?じゃあ、総合科目で」

今日2回目の総合科目か

「承認します」

魔法陣が現れ、ぼくと優ちゃんの召喚獣が姿を現す。

『Aクラス 木下 優子 4236点 VS Fクラス 影月

久遠 4236点』

「なつ! ? 学年主席レベルだと! ?」

驚きの声が上がる

「は、始めてください」

高橋先生も驚きを隠せない様子

ぼくは、目を瞑り、全神経を召喚獣の方にやる。

空気の起動、気配、音すべてを把握して、優ちゃんの召喚獣の攻撃

を避け、カウンターを仕掛ける

『Aクラス 木下 優子 4021点 VS Fクラス 影月
久遠 4220点』

「なんで、目を瞑つて攻撃ができるのよー。」

「・・・集中力」

「訳わかんない！」

「・・・空氣の氣道とかでわかる」

「じゃあ、これならどうー?」

優ちゃんの召喚獣はランスで切りかかるがそれを避けて、サブマシンガンを打ちこむ。

「雷一閃一瞬!」

70点を消費して、一瞬に優ちゃんの召喚獣に切りこむ

が、これを受け止められて、そのまま、ランスに打ち込められる

「甘いわよー」

「くつー!」

『Aクラス 木下 優子 3821点 VS Fクラス 影月
久遠 3573点』

「す、すげー、ハイレベルすぎるだろー!」

Aクラスの生徒が声を漏らす

その後も勝負はつづき、お互いくたくなっていた

『Aクラス 木下 優子 81点 VS Fクラス 影月 久遠 80点』

「優ちゃんこれで決めるよ！」
「ええ、そうしましょ！」

ぼくは、サブマシンガンを捨て、太刀だけを握りしめた
「ハアアアアツ！！」

ガチン！！

先に倒れたのは、ぼくの召喚獣だった

『Aクラス 木下 優子 4点 VS Fクラス 影月 久遠 0点』

会場が一気に湧くと同時にぼくはまた、気を失った・・・

「あれ？また、気を失ったの？」
「そうよ、アンタ、ホントに戦争」とこき落すと氣絶しないと気が済まない
の？」
「うう、面倒ない・・・」
「あんまり、心配させないでよ？（ボソッ）」
「えつ？」
「な、なんでもない！／＼／＼」
「最後、どうなったの？」

「まだ、始まつたばつかよ」

「それじゃ、長時間気を失つてたわけじゃないんだ」

「まあね。それより動いていいの？」

「うん、大丈夫

Aクラスに行かないと。

最後は、みんなと一緒にいたいし

「そう、それじゃ行きましょ？」

保健室を出てAクラスに向かつた

そこに映っていたのは

『Aクラス 霧島 翔子 日本史 97点 Fクラス 坂本雄一
53点』

Fクラスの卓袱台がミカン箱になつた

第十問 帰り道で・・・

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺達に対する高橋先生の声。

ぼくたちは負けた

「・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・・殺せ」

雄二は床に座り込み、つぶやく

良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「そうだよ、明久！」

まずは、社会的に抹殺してそのあとを十分痛みつけ「落ち着きなさいよ！」イデッ！！

後ろから、優ちゃんの拳が降ってきた・・・

「ねえ雄二。0点なら名前の書き忘れとか考えられるけど、53点

てのはやっぱり・・・

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーつ！」

姫路さんと島田さんに抑えつけられながら、明久が叫ぶ

「アキ、落ち着きなさいーアンタだったら30点も取れないでしょ
うが！」

「それについては否定しない！」

そして明久は大馬鹿だ。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くつ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波ーこの馬鹿には喉笛を引き裂くと言つ体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑ですよ！」

姫路さんの説得でやつと落ち着く・・・

「・・・・・でも、危なかつた。雄一が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「・・・・・ところで、約束」

「……（カチャカチャカチャカチャー）」

そして撮影を始める康太。

「わかつている。何でも言え」

潔い雄一の返事。別にかっこよくなはないけど・・・

「……それじゃー」

霧島さんが姫路さんに一度視線を送り、再び雄一に戻す。

「……雄一、私と付き合つて」

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか

「……私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

大胆な告白！

雄一も知つてるなら、答えてあげなよ

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く

「ぐあつ！放せ！やつぱーこの約束はなかつたことに・・・・・」

ぐいっ つかつかつか

霧島さんは雄一の首根ひげを掴み、教室を出て行つた。

「・・・・・」

あまりの出来事に誰も言葉が出ず、教室にじばしの沈黙が訪れる

「Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

声がする方に振り向くと、西村先生がいた

「なんで、鉄人が？」

鉄人つてあだ名か・・・

ぼくもそう、呼ばつかな

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思つてな」

……我がFクラスとはどういう事だ？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なにいつー？」

ぼく以外の男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前らはよくやつた。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかつた。でもな、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つだ。ないがしろにしていいものじゃない」

西村先生と明久が会話してゐる間に出来事とするが・・・

「へーおーんー？」

「行くのかなー？」

「ギクギク」

見つかった

「な、何かな、優ちゃん?」「約束覚えてるよね?」

やつぱり覚えてた!—

「も、もちろん覚えてるよ?」「じゃあ、面うわよ?」

「う、うん(ドキドキ)」「アタシと一緒に帰る?」

「へ?」

あれ、もっときつこのがへるとおもついたの?」「いいでしょ?」「え?あ、うん

一緒にかえるつか

「うん!—」

優ちゃんの家の前まで来た頃

「あ、優ちゃん」

「どうしたの?」

「あんな、約束でよかつたの?」

「ぼくならいつでも一緒に帰るけど・・・」「じゃ、じゃあ、もうひとつ言つていこ?」

「へーおーんー?」「行くのかなー?」

「うるさいよ

「それじゃ、アタシを優ちやんじやなくて優子って呼んで―――
「え？えー？！？・？？」
「いや？」
「いや？」
「そ、そそそうゆうひじじゃなこナビ
「じゃ、呼んで？」
上田使い卑怯だよ～
「ゆ、ゆゆゆ」・・・・
「うん／＼」
なんで赤くなるのー？！？
「そ、それじゃ、ぼく帰るから
またね！」

でも、なんなんだろ「」の気持ち
ゆうぢゅ・・・優子ところのは楽しいけど、明久や雄一、秀くんといふときの楽しいとは、また違つんだよね
かえつて、母さん】でもき】かな・・・

第十問 帰り道で・・・（後書き）

久遠の母（名前がない！）はどう答えるのでしょうか？

回答が目に見えてますが・・・

感想待つてマース

第十一問（前書き）

ぼくとEクラスと召喚獣の第十一問田です！

第十一問

「それは恋ね！」

開口一番母さんが言ひ

「・・・恋？」

「うん、久遠は優ちゃんの事が好きなのよ～」

「・・・ぼくが・・・優子の事を・・・好き？」

「いやー、青春してるね

他にどんなことがある？

「えっと、優子の事が頭から離れなくて、胸が締め付けられるよう

な症状・・・」

「ホンナトに好きなのね～

母さんは優ちゃんなら大歓迎よ～」

「ちょ、ちょっと待つてよ

「なんか問題でもある？」

「まだ、優子と結婚するなんて決まってないし(＼＼＼＼＼＼＼＼)

「ふうん。ま、頑張りなさい～！」

「分かった！」

久遠母 s.i.d.e

あの子が恋ね～

優ちゃんも久遠の事が好きみたいだし

父さん、あなたの息子はきちんと成長してますよ

さてと、赤飯でも炊きますか！

久遠母 side out

翌日
明久 side

「あ、おはよう、久遠」
「ブツブツブツブツ」

「あれ？」

僕は久遠に挨拶したけど、返事が返つてこなかつた
しかもなにかブツブツ言つてたし・・・
すると、雄二が来た

「あ、雄二おはよう」

「・・・ああ、明久おはよう」

「昨日のデートどうだつた？」

羨ましいよね、あんなスタイル抜群な人と一緒にデートだなんて・・・

・
「目が覚めると、牛が殺されるシーンだつた・・・」
「へ、へえ・・・」

「そして、脱走しようと試みたが、また、スタンガンで氣絶させられた」

霧島さん怖！」

「また、目が覚めると、牛が殺されるシーンだつた」
「ホントに一回見たんだ・・・」

「あ、そうだ雄二」

「ん? なんだ?」

「久遠の様子が変なんだよ~」
「どんな風に?」

「なんかね、声掛けてもぶつぶつ言つて返事くれなかつた

「それ、ただ単にお前が嫌われただけだろ？」

「絶対、違う！」

僕達は、話しながら教室に入つた

明久 side out

Noside

「あ、影月おはよー」

気軽に声をかける美波だが・・・

「ブツブツブツ」

「あれ？ 影月？」

久遠はそのまま席に着いた

「あ、美波おはよー」

「え？ あ、うんおはよー」

「どうしたの？」

「いや、なんか影月の様子がおかしくて・・・

「やつぱり？」

「え？」

「久遠、なんか朝からずつとブツブツ言つてるんだよね
どうしたのかな？」

「さ、さあ」

明久は考へるが、バカなのでなにも思いつかない（笑）

「明久君、おはようございます」

「おはよーなのじや」

「・・・・・おはよー」

次に行きたのは、瑞樹と秀吉、康太の3人だった

「うん、3人も、おはよう

ねえ、なんか久遠の様子がおかしいんだけど、何か知らない？」

「影月君がですか？」

「そうなんだ。

「なんかずっとブツブツ言つてるんだよ」

「うむ、ワシがなんとかしょい」

「え？ ホント？」

「任せておれ、伊達に幼馴染はやつておらん」

「じゃ、じゃあ任せれるよ」

「うむ」

秀吉が久遠の方に歩いて行つたあと

「木下君は大丈夫でしょつか？」

「まあ、大丈夫じゃない？」

秀吉 side

朝から、久遠の様子がおかしいらしい

ワシがなんとかしてみせねばのう

もし、無理じゃつたら、姉上に聞いてみるとするかの

「おい、久遠よ」

「ブツブツブツ」

「・・・・・姉上があるぞ？」

「ハッ！（ブンブンブン）」

顔上げ姉上がいるかを確かめていないと判断し、久遠はまたブツブツと言いました

むう、これは姉上にしか無理か・・・

秀吉 side out

「秀吉でもダメか・・・」

「つむ、姉上なら何とかできると思つのじやが・・・
「それじゃ、木下さんを呼びに行こましょう」

「うん、そうだね」

「うむ、行くかの」

「それじゃ行くぞ」

「ウチも行くわ」

「・・・・・行く」

明久達は、Aクラスに向かつた

「――「失礼します」」

「姉上ちよつといいかの?」

「どうしたの、秀吉」

「久遠がおかしいのを何とかしてほしこのじや」

秀吉は心底困ったように言つ

「なにがあつたか知らないけど行くわ」

久遠はまだブツブツ言つていた

「久遠、ちよつといい?」

「ビクツ!」

久遠は優子の声を聞くと同時に教室をものす「スピードで出て行

つた

「 「 「なんか、分かつた気がする（のじや）」 「 「
「え？え？どうもうつ」と
「 「 「木下さん（姉上）は知らない方がいい」 「 「

久遠 side

ぼくは、朝からずっと悩んでいた
もし、昨日したら、この関係が壊れてしまつ」と
ずっと考えていると、優子が来たのでびっくりして思わず飛び出しつけてしまった・・・

（「へ、まともに顔をあわせられないよつ・・・）

ぼくは今、屋上で転がっている

そしてそのまま眠つた

久遠 side out

優子 side

（う～ん、久遠はどうしたのかな）

アタシは、今朝、久遠に声をかけると顔を真っ赤にして走り去つた
ので気になっていた。

そして、今は授業中であてられるのは当たり前である

「木下さん、次のところを読んでください」

「へ？え？あ！、すみません、聞いてませんでした・・・

「ハア、教科書の52ページです」

(ああもうー久遠のせいで恥をかいたじゃない)

そのまま授業を受けて昼休みになり、アタシは代表と愛子と一緒に飯を食べている。

「ねえ、聞いてよ今朝、久遠に声をかけたら顔を真っ赤にしてにげ
「・・・愛子なんにやけてるの？」

「え？ そんなことないよ～」

「ま、いいけど」

「で、続きは？」

愛子に急かされ今朝会つたことを話すと

「それ！ 影月君が優子の事を好きなのを気付いたんじゃないの！？」

「・・・愛子それを言つちやダメ。本人達の問題だから。」

「え？ え？ 久遠がアタシの事を好きなの？」

アタシはすごく驚いた

最初はウソだと思ったけど、顔を真っ赤にして出て行つたのをうなづける

(どうしょ？ アタシも好きなんだけど久遠とは釣り合わないよー／＼)

「代表」

「・・・何？」

「優子がなんか落ち込んだんだけど・・・」

「・・・釣り合わないとか思つてるんじゃない？」

「なんで、わかるの！？」

「・・・勘」

「わっ！」

「はあ、屋上に行つてくるね

「はーい、いつてらっしゃい」

優子 side out

久遠 side

ぼくが目を覚ますと、時間的に4時間目の後半だった。
それにしても、懐かしい夢だつたな
ぼくの初恋は小1からだから・・・9年！？長いな
でも、それを終わらせないといけないよね
いつまでも、長延ばしにできないし！

キーンゴーンカーン

昼休みか、もうひと眠りするかな

ぼくはもう一回眠った・・・

久遠 side out

優子 side

アタシが屋上に行くと、先客がいた。

それは、アタシの想い人

影月 久遠だつた・・・

優子 side out

第十一問（後書き）

駄文で申し訳ないです・・・

第十一問

父さんが死んだ頃はぼくも、小さく幼かつた・・・
ぼくは、今までにいくらい泣いた・・・
学校もずっと休み、家からは出なくなっていた・・・
父さんに貰ったハーモニカ

これを抱きしめ毎晩泣いていた・・・

父さんにはいろいろなことを教えてもらつた
大事なことを始め、どうでもいいこともあつた
その一つ一つが思い出としてよみがえり、余計に悲しくなつたりも
した。

いつもいつも一緒だつた父さん
ぼくは、その悲しみの呪縛から抜け出せなくなつていた・・・
学校の先生や友達が来ても、何も話せなかつた

そんな時、優子がぼくの家に来て、ぼくに声をかけてくれた
その時の優子は泣きながら言つてくれた

「くおんが、そんなんならあたし達はどうなるの!？」

励ましでもない言葉にぼくは驚いたけど、いつまでの父さんの死を
引きつてはいけないと思つたとも同時にぼくは、そんな不器用な
励まししかできない優子にこの時から好きになつていたんだと思う。

父さんの「一度好きになつた女は最後まで愛せ!」の言葉

ぼくは、優子の事が好きだ

今までの関係が壊れるのが怖い!でも、そんなことでは、前に行け
ないから・・・

「ぼくは田を覚まし、頬に流れた、涙をぬぐつた

「父さん、ぼくは前に進む・・・・・」

独り言をつぶやいた時

屋上の扉が開く音がした

「ぐ、久遠？」

「ふえ？」

「ゆ、優子かどうしたの？」

「え、えっと風に当たりに来た・・・・・」

「そうなんだ」

「・・・・・」

沈黙が続いた。

「優子に言いたいことがあるんだ」

「なに？」

「ぼくは、多き深呼吸をして

「ぼくは、優子の事が好き!-ぼくと付き合つてください-」

告白した直後、優子が抱きついてきた

「アタシも、久遠の事が大好き
でも、アタシ胸小さいよ?」

「胸なんて関係ないよ」

「嫉妬深いよ?」

「それだけ愛されてることだから構わない」

「それじゃ、それじゃ・・・・・」

「優子、ぼくはありのままの優子が好きなんだ
だから、気にする必要なんてないよ?」

「ありがと、アタシもアリのままの久遠が大好きアタシでよかったです
ら付き合つてください」

「はー、喜んで！」

必ず、幸せにしてます

父さん、まくは木下優子さんを一生愛するよ

「優子

「どうしたの？」

「一生、一緒にありますな

「うん…」

「おーおー、お熱い」と（せんせん）
「優子が心配で追いかけてきちゃったけど、その心配はいらなかつ
たみたいだね」

「……私も、雄二からあんな告白がされたい

「……おめでとう、久遠」

「木下さん、おめでとうござります。」

「影月、木下さんを泣かすんじゃないわよ？」

「久遠、これからもがんばってね」

「ふう、やっと付き合つようになつたかのう
久遠、姉上を泣かすでないぞ？」

「「み、みんなど」からみてたの？」

「「秀吉（木下）（木下君）」「」「つむ『優子に言いたい』ことがあるんだ』からかの「ほとんど、最初からじやないか！」

「それと、声真似やめて、ものすごく恥ずかしいから……」「ぼくは今までにないくらい、赤くなっているだらう優子も赤くなっていた

「お主はなぜ姉上が来た時逃げたのじや？」

「え、えっと、それは・・・／＼／＼」

「あ、それ僕も聞きたい」

「えつと、ぼく昨日、優子の事が好きなんだって気付いたんだ秀くんや明久といふ楽しさとはまた違う楽しさがあつてそれから（シユー）」

「久遠が処理落ち仕掛けてる…？」

その後も女子は優子に、男子はぼくをとりかこみ話を聞いていた

これが、放課になると、FFFF団に掛けられ、ぼくは9分（新記録）で倒した・・・・

その日の夜

「・・・・ねえどうして赤飯なの？」

「優ちゃんと付き合つてるんでしょ？」

「なんで知ってるの！？」

「フフフ、秘密よ～」

影月家、木下家では赤飯がならんだと言つ・・・・

第十一問（後書き）

久遠と優子がつながりました

第十三問

桜の花がこの坂から姿を消し、新緑の花が芽吹き始めたこの季節。文月学園にはまた一つイベントが近づくこの季節。
その、イベントに興味を示さないクラス

その、クラスは

2年Fクラス！！

「きなよ、明久！」

「いくよ、久遠！」

「明久のボールなんか、ホームランにしてやる！！」

ホームルーム中の時間でぼくらは、野球をしていた！

「言つたな！？やつてみろ」

明久の後ろから砂煙を出しながら走つてくる西村先生を見た瞬間、
ぼくはFクラスに駆け上がつた！

壁を垂直に走りました・・・

「フハア、しんど！」

「「「うわあ！？」」「」

「あ、ゴメンゴメン」

中にいた、秀くん、姫路さん、島田さんに謝る

「お、お主はどこから上がってきたのじゃ！？」

「壁を垂直に走つて・・・あれ？ぼく人間離れしてると平然とや

つたね？」

「ワシの想像を遙かに超える回答が返ってきたぞい……」

秀くんは呆れてるが、姫路さんと島田さんは田を点にしてる

その後、鉄人は怒鳴りながら、雄一と明久を追いかけていた。

「まったく、お前達は学園祭の売り上げで、設備を上げようとしている
考へはないのか？」

『『『それだ！』』』

このクラスってやっぱり単純だよね……

でも、雄一はやる気がなくて、実行委員を作ろうとしていた
1人は島田さん
もう一人は候補を上げることとなつた

? 吉井

まあ、予想通りだね

? 明久

ぼくのめがあかしいのかな？

どっちみち、明久がなるんだろうけど

「この2人のどっちかで選んでくれ」

「うーんどうする？」

「両方ともクズだしな」

「こら！人前で肩呼ばわりするな！……って久遠なんで、お前は肩だ
ろ？みたいな視線送ってるのさー？」

「え～氣のせいだよ～」

「だから、その田やめて！？」

こんな感じでFクラスは口常的でした

「これを、日常にすんな！」

みんなが、出し物を決めてる間、優子にメールをしていた。

To 優子

From 久遠

Re

今度の日曜日、暇?

1分後

To 久遠

From 優子

Re

暇だけど、どうしたの?

授業中だよね?

人のこと言えないけど・・・

To 優子

From 久遠

Re

どこかに行かない?

To 久遠

From 優子

Re

いいわよ

10時に噴水の前でいいかしら?

To 優子

From 久遠

R e R e R e R e

OK

じゃ、まつたね～

ぼくたちのメールが終わると

訳の分からぬ、出店名が並んでいた

鉄人が来て、明久を実行委員に選んだことが悪い！と言っていた
あなた、それが教師の発言ですか・・・

ぼくは、帰り支度を始め、帰つてると、優子の悲鳴が聞こえたよう
な気がして、走った

そこには、雄一と明久、優子（たいそうふく／e／r）がいた
「ねえ、雄一、明久これはどうゆうことかな？かな？」
「「」、これはその・・・」

バキッボクッガキッ！！

二つの屍がいた

「優子、大丈夫なにもされてない？」
「うん、ありがと」
「よかつた」
「それじゃー、につしむらせんせー」
「なんだ？」
「この二人は女子更衣室にいました。」
そして、優子が危険な目にあつたので、ご指導よろしくお願ひしまーす」

「わかった、あつあつじごとくへ
やつた」

その後、優子を待つて一緒に帰った

その週の日曜日

ぼくと優子の初デート

第十四問 初テート

9・30

ぼくは、噴水の近くまで、来ていたけど、優子が3人の男に絡まっていた。

なになに？

『ちょ、はなしなさいよ！』

『無理無理、オレ達と良い事しない？』

『俺は気が強い子が好きだぜ』

『オレ達と遊ぼうぜ』

ふむふむ

ブツチーン！

オレの中で何かがキレる音がした

オレは、そいつらに寄つて行き、一番手前にいた男の後頭部を殴つた

「オレの、つれに何か用ですか？」（一ノ口二ノ口）

オレは、ここにこしてるけど、どす黒いオーラをはなつているだろう

「んだよ！-てめえ！

やんのか！？」

「そつちがその気なら、オレも本氣で行くぞ！」

オレは、そいつらを10秒で土下座させていた。

F F F 団より弱かつた

「「「すいまんつしたー！」」

「もへ、この子にこんなことしたら・・・・殺すよ？」

「「「ひいっ！-自分調子くれてました」」

「逝つてよし」誤字ではないです

「「「ありがとう」やれこやす！-」」

そう言つとチンピラ達は逃げて行つた

「優子、ごめんね大丈夫だつた?」

「うん、ありがとう」

「それじゃいこつか」

「うん」

「どこか、行きたい所ない?」

「ん~、映画見たいかな」

「分かつた」

ぼくと、優子は自然に手をつなぎ、映画館に入つた
内容は、純愛物で最後が感動できた。

優子は、感涙してたけど
ぼくわねえ? ほらあれですよあれ

「どれ?」

作者さんは引っ込んで!
「すみませんでした」

「優子、どうだつた?」

「すご~くよかつたわ

ぐう~

「そろそろ、お昼にしようか?」

「う、うん~」

映画が終わつたのは12時40分なので、もう昼時だつた。
ぼくと優子は、近くにあつたサイリアに入つて、1時間ぐらい話
していた。

「で、次はどこに行くのかな?久遠?」

「ん~、商店街で買い物しない?」

「うんそれいいね、ちょうど買いたい物もあつたし

ぼくたちは、歩いて商店街に向かい、買い物をした。

「久遠、どうちがいいと思つ？」

そう言つてとりだしたのは、薄いピンクのワンピースと白のワンピース

「ん~、優子ならどっちでも似合ひやうだな~、ピンクの方かな?」
「わかった、これ買つてくるね」

「ぼくが、払うよ」

「いいわよ、自分のんだし」

「それじゃ、ぼくからのプレゼントからうへ」とで

「わ、わかったわよ//」

そう言つて、会計を済ました。

「ねえ、ゲームセンターでプリクラどうない?」

「うん、いいよ」

すぐ近くにあつたゲームセンターを指さしながら言つ
優子は台を選んでたけど、ぼくにはさっぱりわからなかつた
お互ひ200円ずつ入れて、カメラの前に立つた
秒カウントが始まり、1秒になつた時、優子がぼくの頬にキスをし
た。

「ゆ、優子?//」

「えへへ//」

可愛いよ、可愛すぎるよ//

そんなこんなでゲームセンターを出た後、もう夕日が沈みかけて
いた

「ねえ、優子」

「どうしたの?」

「公園に行かない?」

「公園?いいわよ」

「ここからは、少し遠い公園は、この時間、夕日が綺麗に見えるのでぼくのお気に入りスポット。」

「優子、楽しみにしててよ?」

「なんか言った?」

「いや、なんでもないよ?」

「ふうん」

「ついたー、優子はけょっと目を瞑つて、見せたい物があるから」

「分かった」

少し歩くと、見えてきた

「優子、目開けていいよ?」

優子 side

アタシは、久遠に目を瞑るよひに言われて、目を瞑つたまま、久遠に手をひかれ歩いていた

「優子、目開けていいよ?」

久遠の声。

アタシはゆつくり目を開ける

そこには夕日だけが見えていた

障害物が何もなく、なにもかもを照らしているような気がした

優子 side out

久遠 side

優子に田を開けるよ「う」と

優子はゆっくりと田を開けて、言葉が出ないでいた

「どうだつた?」

「・・・綺麗」

優子は、そう答えると

意識を戻して「すごく、綺麗。久遠連れてきてくれてありがとうございます」と、
その言葉を聞いただけであれしくて仕方なかつた。

「どういたしました」

僕達は、その夕田をバックに唇を重ねた

その日の帰り

優子と、デートの帰り、たわいもない会話をしている
でも、ぼくの視界に信号無視してきた自動車が目に入つた

「優子、危ない!」

ぼくは、優子の手を引いたけど変わりに自動車が来るところに入つ
てしまつた

そして、ぼくと自動車は接触し、優子が叫んでいたのを最後に意識
を暗闇に落とした

久遠 side out

第十四問 初テート（後書き）

久遠が交通事故に巻き込まれました

この後はどうなるのでしょうか？

作者にも全く分りません！

第十五問（前書き）

ぐだぐだになつてます
すみません・・・

第十五問

優子 side

今日のデートの振り返りながら、あたし達は帰つていた
いつもと変わらないような会話だつたけど、久遠といるだけで、ま
つたく違うような感じがした
久遠はアタシといるときいつも笑顔でいてくれる
その笑顔にいつもドキッとせられる

でも、そんな久遠がいなくなるなんて考えてもなかつた。

交差点に差し掛かると、信号無視の車がアタシの方に突っ込んできた
「優子、危ない！」
アタシはその言葉と共に、車の進路から外れたけど、久遠が車にひ
かれた・・・
「久遠！？」
「優子、無事で・・・よか・・・つた・・・」
久遠の意識がなくなり、アタシは泣き叫んだ

その後、誰が連絡したのか分からぬけど、救急車がきて、久遠と
泣いてるあたしを乗せて近くの総合病院に運ばれた・・・

優子 side out

秀吉 side

時刻は夕方、夕日も沈んでいつた頃、一本の電話が入った。

PriPriPriPriPri

「今出るのじやー

ワシは独り言をつぶやきながら、電話を取つた

「もしもしなのじやー

『その声は、秀くん?』

電話の相手は、久遠の母上じやつた

「うむ、秀吉じやがどうかしたのかのう?」

『落ち着いて聞いてね

久遠が交通事故に巻き込まれて、総合病院に運ばれたつてさ

つき電話がかかってきたの・・・』

「そ、それは誠なのか?」

『久遠は無事なのか?』

『わからないけど、あの子なら大丈夫
守りたい人ができたつて、言つてたから
きつと、きつと戻つてくる。』

それで、秀くんも病院に来て優ちゃんを励ましてほしいのよ

「わ、わかったのじやー!」

ワシは、電話を置き、久遠のいる病院に走つて行つた

ワシが駆け付けた時には姉上は、下を向き泣いていた

「姉上!..!

ワシは、走り姉上を呼んだ

「秀吉い、どうしよ?久遠が久遠があ!..」

「大丈夫じゃ、安心せい!..」

あやつは絶対帰つてくるぞい!..」

久遠、死ぬなよ？

お主には姉上がいるから絶対に死ぬんじゃないぞい
例えどんなことがあつてもじや・・・

秀吉 side out

優子 side

アタシはこれまでにないくらい泣いていた。

「姉上！？」

秀吉が来てくれた。

アタシは、秀吉に抱きつき、泣いていた。

そんなアタシを秀吉は励ましてくれた

少し元気が出てきた。

秀吉にはいつも出来の悪い弟とか言つてゐるけど、今はものすゞく頼りになつた。

でも、やつぱり久遠がいないとアタシはやつぱり久遠を一番頼りにしている

日付が変わる頃、手術が終わった

優子 side out

「…」はどうなんだろう?

ぼくは、歩き続けた、何もない白い空間を
そこに、知ってる顔がいた。

「どう…さん?」

「久遠か…」

大きくなつたな」

ぼくが、小さい時に亡くなつた父さんは優しい雰囲気を漂わせていた。

「どうした? こんなところに来て」

「実はね、優子が車に跳ねられそうなのを庇つたらぼくが弾かれちゃつたんだ」

「そうか、優ちゃんとはどんな関係なんだ?」

「恋人

ぼくは、一生優子の事を愛するつて決めたんだけど、もう死んじやつたみたいだしね」

「そうか、大事な人を守つたんだな?」

でもな、お前はここに来るのは早過ぎた
優ちゃんやその周りの人のところに戻れ

「え?」

「お前は、まだ生きれるんだ。そして、幸せになつて…」

「分かつたよ。

久しぶりにどうせんと話せてよかつた

それじゃーね

「ああ、行つてこい」

ぼくの周りを光が囮み、そのまま意識を失つた

久遠 side out

秀吉 side

久遠が手術をした2日後まだ久遠は意識を取り戻さなかつたが、ワシは学校に来ていた
姉上は休んであるが・・・

「明久、雄二、ムツツリーに姫路と島田ちよつといいかのう？」

「どうしたの、秀吉？」 明久

「そうよ、そんなに暗い顔して」 美波

「実はのう、久遠が交通事故に巻き込まれてのう」

「なんだと！？」

「それで、久遠は大丈夫なのか！？」 雄二

「手術は成功したんじやが、意識を取り戻さなくているのじや」
ワシは明久達に久遠の事を伝えたのじやが、みな、信じられんとゆう顔をしておる。

「そ、それで木下さんはどうしてるのでですか？」 姫路

「姉上はずつと久遠についておる」

「そりなんですか・・・」

「大丈夫じや、久遠は絶対に意識を取り戻す。

じやから、お主たちはそこまで心配する必要はないのじや
ワシは作り笑いをしてごまかした

その日の授業はなにも頭に入らなかつた・・・

秀吉 side out

久遠の手術が終わって2日後

久遠はまだ目をさまない

「早く、戻つてよ久遠」

アタシは祈ることしかできなかつた

アタシはおもむろに、久遠のハーモニカに手を伸ばし、音を奏でた。

久遠の好きな音を耳だけ出て覚えていたけど、指が勝手に動く
窓の外に向かつて吹く

涙が出てきたけど、それでも吹いた

綺麗な音だね

「

第十六問

久遠 side

光に包まれて、また白い空間を歩きだしたぼくは、いろいろなことを思い出しながら歩いていた。

公園で泣いてる、ぼくと同じくらいの年をした女の子がブランコに座っていて泣いていた。

「どうしたの？」

当初、幼かつた僕は躊躇なく、声をかけた
「えくつえくつ」

ずっと泣いている女の子に手を差し伸べると、その女の子はぼくの手を見て、手を差し出してきた

「どうしたの？」

ぼくはもう一度同じ質問をした

「帰り道が、分からなくなっちゃった」

「ぼくが、一緒に探してあげるー！」

「ほんと？」

「うん、ほんとー」

泣いてないで行けりよ」

「わかった」

女の子の顔は、笑顔になり、とても可愛かつた
これが、ぼくと優子との出会い。

優子の家を探し始めたけど、あまり、分からなくなっていた。

「とりあえず、ぼくのお家に行く?」

「うん、行く」

涙目になつていた女の子を励ましながら歩いた
ぼくの家が見え始めたころ

「あ!アタシの家だ」

「え?ホント?」

「うん!、ここアタシの家!」

意外にも家が向かい同士だつた

それから、秀くんとの出会い、幼稚園や小学校で一緒に渡航しあひ
々など、様々なことを思い出した

光が見え始めた時、ハーモニカの奏でる綺麗な音楽が聞こえるとと
もに

「ほんと田を覚ました……」

「綺麗な音だね」

素直にそう思つた。

優子は、ぼくの方を向いて、凄く驚いていた。
そして、涙が零れおちている

「くあん？」

「ただいま、もう一度それを聞かせて？」

「わかった」

涙を拭き、笑顔で言った
そして、吹き始めた曲は、優しく、清らかでどこか楽しそうな曲
そして吹き終わる。

「久遠」

「どうしたの？」

「ありがとう」

「ぼくなんかした？」

疑問に思つ。

普通は、心配かけるなーとか怒りそうなのに・・・

「ちゃんと、戻つてきてくれたから」

「ぼくは、どこにも行かないし、もう優子を泣かせたりしないから」

「うん！」

先生が来て、清涼祭の出口は出てもこいことになった。

優子は安心したのか僕の隣のベットで寝ている

（可愛いよね、優子は

ぼくに過ぎたる女性だよ）

ぼくは、優子の頬にキスをした

翌日

いつものメンバー + 霧島さんと上藤さん、西村先生が見舞い来てくれた
西村先生が来てくれたのは意外だつたね（笑）

「あ、そうだ優子」

「ん? どうしたの?」

優子は毎日見舞いに来てくれてます
うれしいですね。

「ぼくの部屋にギターがあるんだけど、明日持つてきてくれない?」

「あんた、ギター始めたの?」

「まあね~、音楽は好きだからね」

ぼくは、中学校の時からギターを弾いてるので、うまい自信はある
ります。

「うん、分かつたわ」

「ありがとねえ」

「気にいしないでいいわよ」

いつも、見舞いに来てくれる、母さんや優子に秀くんに他のクラス
メートたち

ぼくは、ホントに恵まれてるよね

今はものすごく幸せだよ

優子に持つてきてもらった、アコギを屋上で弾いている。

「つまいわね」

「うん、中学のころからやつてたから、これが、第三の宝物かな?」

「へえ、第一一わ？」

「ハーモニカだよ？」

「え？ ジやあ第一はなんなのよ？」

「優子に決まつてるじゃん／＼」

「あ、ありがと／＼」

相変わらず、あの子たちは、熱いわね
ホント、うちわが欲しいくらいだわ

「あ、久遠のお母さんこんにちは～」

「あらあら、明久君じゃない

「じめんね～、今は優ちゃんと熱い時間を過ごしてるので～
「はは、相変わらず、仲がいいですよね

久遠母 s.i.d.e

羨ましいです

「明久君にもそんな女の子ははよつてくるわよ~

絶対にね」

若いっていいわね

私も、お父さんと高校生になつて付き合い始めたから、久遠達の気持ちわかるのよね~

久遠、頑張りなさいよ~!

久遠母 s.i.d e o u t

第十六問（後書き）

PV12000

ユニーク2000を越えました。

こんな駄文を見ていてくれている人に感謝を申し上げたいです
ありがとうございます

これからも、ぼくとFクラスと召喚獣をよろしくお願いします

第十七問 遅れた清涼祭！！

ぼくが、退院した日は清涼祭の1日目だったのでもれなかつた少し、悲しいです・・・

その分2日目を張り切るけどね！

ぼくの目にひとつ的新聞？が止まつた

文月新聞

今日から、事故で入院していた、2年Fクラスの影月久遠君が登校します
私達新聞部は影月君に突撃インタビューをしたいと思つております
！！

次の、発行をまで期待しててください！

とのこと

（うわあ、なに聞かれるんだろ？
ん？これは、明久の記事？）

ぼくが見たのは、明久がメイド服を着ている記事だった・・・
(明久、目覚めたんだ)

ぼくは友達の性癖に少し落ち込んだりもした。

教室に向かう時、秀くとと云ふ、職員室についてもせつこのことで着いて行つた

「秀くん、どうしてこんなにきれいになつていてるの？」
「む？ 全員で飾りつけなどをしたからなのう」「Fクラスがやる気を出すことが意外です」
「だって、Fクラスとは思えないくらいに綺麗になつていたんだからね
ぼくは、Fクラスに着いた時、言葉を失つた

「それじゃ、はいるか～」
「うむ

パンツパンツパンツ！！

教師つの扉を開けると、クラッカーが鳴り響き、黒板には『影月久遠 退院おめでとう!』の文字があった

みんなあにがと

「今日は、昨日の分も合わせてガンガン働くからね！」
「おう！」

教室には、Fクラスを始め、優子に霧島さん、工藤さんと西村先生もいた

Fクラスのみんなはバカで単純だけど、仲間思いな所があると、改めて思った。

普段のFクラスに仲間思いとゆう言葉は存在しません。

「さてと、朝から、テスト受けてて、既にから屋上で寝てくるわ」

「ぼくも行くよ、11時になつたら起こして」

え」と、彼らに何があるのだろう?

「秀くん、なんかあるの？」

「うむ、清涼祭のイベントでのう、雄一と明久が決勝に残ったのじ

明久達が表つてゐた。大繁盛でどうか氣がつかない。

「」「」「」「」「」

中華喫茶『ヨーロッパン』へようこそ。」

ぼくは、接客をしていた。

近附のもの

外しにとた

色々言つてくれる人かいました
ぼくは、幸せ者ですね

卷之二

「え? でも、昨日来てなかつたから。」

「いいのよ、あんた今日働きっぱなしだからビーチに行つてもいい

גָּמְנִים וְעַמְקִים בְּבֵית־יְהוָה

「そ、うだぞ、影月、ちつたあ休憩しろや」

「分かつたよ、ありがとねー」

ぼくは、教室を出たのはいいけど、ビリビリしつかなか
あ、そうだAクラスはメイド喫茶だよね
いつみよー

「おかえりなさいませ、『主人様！？？』

「ゆ、ゆうこ！？」

優子に接客されるとはびっくりだね

「えっと、いらっしゃりでござり——」

「う、うんありがと（う、凄く似合つてます）——」

ぼくは、パンのセットとアイスコーヒーを頼んだ

「お待たせしました。パンセットとアイスコーヒーとメイドとの婚
姻届けです」

ちょっとまって？

状況確認

パンのセットとアイスコーヒーを注文

注文したもの + 婚姻届が出でくる

OK

「えっと、優子？」

「なんで、婚姻届？」

「べ、別にいいじゃない。」

お世帯元に実印貸してもいいてるから、押してくれない?」

優子と結婚？

ぼくはまだ結婚できないけどね

ぼくは、優子から、ハンコを受け取り、婚姻届に推した

「まだ、結婚できないけど、卒業したらしようね?」

「ふう?」
「んありかと?」

ぼくと優子は婚約者になりました

第十八問

「それじゃ、優子、ぼくは帰るからね～」

「いつも、遊びに来てよ」

「うん、分かったわ」

廊下を歩いていると、またせや、退院おめでとうとか声をかけられた
ぼくって、人気があるのでしょつか？

「あ、影円君やつと見つけた！」

声をかけてきたのは、知らない先輩？ だつた

「えつと、どちらをまでしょうか？」

「私はね、新聞部の部長さんよー。」

「は、はあ

で、なにが用でしょつか？」

ぼくは疑問に思いました

新聞部と何か話すようなことがあるのでしょつか？

「これを見てー。」

取りだされた紙を見てみると

『彼氏にしたいランキング1位』 全学年

『弟にしたいランキング1位』 3学年のみ

『兄にしたいランキング1位』 1学年のみ

・・・・・

「えつと、なんですかこれ？」

「三冠王よー！」

ウインクしながら、言つ先輩

「状況があまり、分からないです・・・」

「まあ、とにかく、三冠王のコメントを取りに来たのよ
とりあえず『メント』ちょうどい！」

「えつと、死んだ父親がよく言つてました『久遠、男ならなにがな
んでも、一番をとつてみろ！』と

父さん、ぼくは三冠王に輝いたよ

「時間とらせてごめんねー

来週この記事書くからー

ようしへー

疾風のゴとく走り去る、先輩

(そういや、聞いてないな

ま、いつかどうせもう取材なんてないだろうし・・・)

「さてと、Fクラスへ帰りますか！」

Fクラスへと歩き出した

「ただいまーつてうわっ！」

Fクラスは、満席で、ホールを任せていた、人たちが走りまわつ
ていた

ぼくは、すぐに着替え、ホールにでた

雄二と明久もいた

どうやら、優勝したみたいで、その顔を見にお爺さんが増えたらしい

その中には久遠を見に来たお密さんもいた

『ただいまの時間を持つて、清涼祭の一般公開を終りました。
各生徒は、速やかに撤収作業を行つてください』

「終わった」

ぼくは、イスに座り込んだ

「お、おわった」

「さすがに疲れたのう」

「・・・・・（「ク「ク）」

全員疲れたみたい

それもそうか、あれだけ繁盛してれば

「そういえば、姫路さんのお父さんどうしたんだろう？」

「なんだ？ 未来のお義父さんが気になるのか？」

「べ、べつにそういう意味じゃないよ」

「ん？ なにがあつたの？」

「実は、姫路が転校しそうになつててな」

「そ、そうだつたんだ

明久、頑張つてね？」

「久遠まで、なんてこと言つんだよー。」

ぼく達は、笑つていた

「じゃ、ウチらは着替えてくるか！」

落ち着いた時に島田さんは言つて、教室を出て行つたが

「え、どうして！？」

明久、驚き過ぎ

普通は着替えるでしょ

「恥ずかしいからに決まつてゐでしょー。」

それはそうだ（笑）

「ワシもいくかのう」

「秀吉はダメ！」

「…………（コクコク）」

明久と康太が秀くんを抑えた

「なにやつてんの！？」

「秀吉にはこのままいでいいから！」

秀くんは苦労ものですね

「おい、明久、ムツツリー二行ぐぞ」

「どに？？」

「学園長室だ」

「うんわかつた

「なんで、学園長室に行くの？」

「ああ、気にしないでくれ」

「え？ うんわかつた」

ぼく達が、片付けをしていると、花火が屋上と教頭室に直撃して、
西村先生に追いかけられていた

「なにやつてんだか……」

ぼくのつぶやきは誰にも聞こえなかつた

第十九問

「えつと、みんな2日間お疲れ様

今回の学園祭はみんなとのいい思い出になりました。
これからも、楽しい学園生活を送りましょう!
てことで、かんぱーーい!」

「――「かんぱーーい!」」

Fクラス（2名除く）の打ち上げが始まった

ぼくは1回しか行ってないけど、すげーだったのしかった

考え方をしていると、顔を倍に膨れ上がった2人が来た

「えつと、明久、雄一お疲れ様?」

「なぜ、疑問形?」

わかりませんね

「それじゃ、楽しみましょつか?」

「おう(うん)」

僕達が雑談していると、島田さんが話に入ってきた

「あれだけの事をやつておいて、退学どころか停学にするならない
んだもの。妙な噂が流れて当然でしょ? ウチだって気になるし」

島田さんが、明久と雄一にジュースの入った紙コップを手渡す。

「ん、ありがと」

「ああ、サンキュー。それで、店の売り上げはどうだった?」

「やうね。すゞいつて程じやなかつたけど、たつた2日間の稼ぎと
しては、結構な額になつたんぢやないかしら？」

「ふむ、どれどれ……？」

島田さんが収支の書かれたノートを取り出し、雄一がそれを覗き込む。

それを見て、少々顔をしかめる。

「「」の額だと、机といすは苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」「やつぱりな……あの常夏コンビ共わえいなけりゃ、もう少ししましだつたかもしれないけど」

常夏コンビ？

ホントぼくがいない間に何があつたんだう

「確かに、それが痛いよね……とにかく、姫路さんは？」

ぼく達が騒いでいる間、姫路さんの姿だけはなかつた
「大丈夫だろ、俺達は結果を残した。多少、設備に問題があるけど
な」

「すいません、遅れましたー」

雄一のフォローの後、微笑ましい姿で走つてくる姫路さん

「あ、瑞樹。どうだつた？」

「はいっ！ お父さんも分かつてくれました！ 美波ちゃんの協力
のおかげですー！」

その言葉を聞いて、ホツヒー息つく明久

ぼくは、缶ビールを飲み干し、ミニ箱に入れた

「あ、久遠」

後ろから声をかけられる

選択肢

？ 後ろに振り向いて返事をする

無視する

振り向いてキスをする

？ 暴言を吐く

ちょっとまた！

？と？

がおかしい！

てことで、1だね

「ん？ ああ、優子

これ飲む？」

ぼくが差し出したのは、チューハイ

「ええ、いただくわ」

優子はのどが渴いていたようで一気に飲み干した

ぼくは今ものすゞぐ後悔をした！

「ぐうおん～」

酔った優子が抱きついてきたり

「抱いて～」

とか

「キスをして～」

とか言つてきたからね

やつこえば、おじさんもおばさんも酒に弱かつたな・・・

「雄一は、霧島さんといチャイチャイしてゐるから、明久も姫路さんとい島田さんといチャイチャイしてゐるから、秀くん」

「なんじゃ？」

「優子がこの状態だから、家に連れて帰るね～

「つむ、分かつたのじゃ」

帰り道

「スウースウー」

「寝ちゃつたか～」

優子をおんぶして、家の前まで来ていた。

ピンポン
電子音が響く

「どちら様ですか？」

「影用ですけど」

「あら、久遠くおびうしたの？」

「優子を連れて帰つてきました」

「あら、やうそれじやあがつて？」

「有難いづいざわいます」

優子をベッドの上に置いたけど襦袢を握られていた

「えつと、どうしたらいこんだろ？」

まくは優子と同じ部屋で一日を明かすこととなつた

第十九問（後書き）

最近、あまり思いつかなくなってきた・・・

第一十問

優子 side

目が覚めると、アタシが久遠を抱き枕にしているみたいでいた
久遠は気持ちよさそうに寝てるけど

「何この状況？」

この騒ぎは誰にも聞こえなかつた

「ま、いいか。もう一回寝よっと」

アタシは、夢の中へ旅立つた

優子 side out

「ふあ～、あ！？」

起きて2秒ぼくはすぐに覚醒した。

だって、優子と抱き合つて寝てるんだもん
「うう、どうしたらいいんだろ？」

「ファ～、っ！！！」

優子も声にならない声を出している

そこから、20秒ぐらい見つめ合っていた

実際には10秒です

「ど、どりあえずどこに？」「ぼくが立ちあがろうとするけど優子が裾をひっぱていて、立ち上げれない？」

優子？

「アーティストの才能を発揮するためには、アーティスト自身が何をやるかよりも、アーティストの周囲の人間たちが何をするかの方が重要だ。」

ぼくの理性はなんとか耐えました。・・・
避妊用具ないのにやつてたまるかー！

今日は、
休日かー

あ、ちなみに今は自分の家ですよ

ご飯食べて、みんなと雑談して帰つてきました

優子とは、キスまでしましたが・・・

危なかつた。非常に危なかつた

今は、家で勉強します

ピンポーン

誰かが家に着たみたいですね

「はい」

ぼくは扉を開けた

「あれ？ 優子に秀くんどうしたの？」

「「久遠？ なんで（なぜ）メガネをかけてるの（のじや？）」」

「あ、ぼく、いつもはコントクトなんだ

今日は、休日だしめんどくさいからいいかなーって

「く、へえ そなうなんだ（なんか、めちゃくちゃいいー。）」

「どうかしたのか、姉上？」

「どうもしないわよ！」

「立ち話も難だし、上がつて～」

優子と秀くんをワーディングへと呼んだ

「今日は、どうしたの急に？」

「ちょっと、来てみたくなつてのう」

「ええ、どんなところか氣になつてたし」

「へえ、なにもないけど、くつろいでいつてね～

「「わかった（のじや）」」

ぼく達は、雑談をしていたら、最近になつていた

「昼」はんじゅある? 「

「外食つて気分じゃないしね」

「つむ、どうするかのう」

そういうえば冷蔵庫になんかあつたかな?

「優子、秀くん

オムライス食べる?..

「え?..」

「ぼく、オムライス作るの得意なんだよ~」

ぼくは、オムライスだけは作れた

「頂くわ」

「そうじやのう」

昼ご飯を食べ終わり、ぼくの部屋で雑談をしていると、急に睡魔が来て、そのままねてしまった

「ふあ、つて優子と秀くんも寝てる」

ぼくは、2人に布団をさせ、リビングに向かった

「久遠、優ちゃんと秀くんが来てるの?..

「まあね

「ところでこいつ帰ってきたの?..」

「3時半ぐらいかしらね

部屋にはいつたら、3人仲良く寝てて昔を思い出したわよ~

「やつだね、昔はよく、一緒に遊んで一緒に寝てたよね」

なんか、久しぶりに母さんと話した氣がするのは氣のせいだらうか？

第一十問（後書き）

短くてすみません

第二十一問 プール編（前書き）

今日は、すごく短いです

第二十一問 プール編

明久 side

今日は、休日で、雄一が遊びに来ていた

「雄一、何か買つてきたの？」

「食い物だ。お前の家は何もないからな」

「へえ、差し入れとは気が利いてるね」

「雄一はやつぱり友達なんだね」

雄一は袋を開けて、中にあつたものを取り出す

- ・コーラ
- ・アイスコーヒー
- ・カツブめん
- ・カツブ焼きそば

食べ物と飲み物がそれぞれ2つ入っている

これはありがたい

「雄一は何を食べるの？」

イスに座っている雄一に話しかける

「俺か？俺は」

「コーラとコーヒーとラーメンと焼きそばだ」

予想を裏切る答え

「貴様、僕に割り箸しか食べさせない気だなー!?」

「割り箸空氣かお前は?」

割り箸はやらん。俺が手で食べる羽目になる

「失礼だなあ、無機物の袋よりは食べ物に近いよ

「心配せんでも、ちゃんと買つてきてある」

さすが雄二だね!

・こんにゃくゼリー

・ダイエットコーラ
トコロテン

・心太

カロリーー〇ーー!

「僕の貴重な栄養源があああーー!」

僕と雄二はこの後

仁義なき戦いまで発展した

食べ物はスタッフ(明久と雄二)がおいしく頂きました

明久 side out

「つてことがあって、休日は散々だつたよ
「そつじやつたのか、それは災難じやのう」

あれ？自業自得だと思つのはぼくだけ？
整理してみよう

雄一が明久に家に行く

差し入れがカロリー0

明久が怒る

「一ラをかけあう

べとべとになり、シャワーを浴びようとすると、明久の家はガス代
を払つてない

学校のシャワーを使おうとする

ついでに、プールも使う

西村先生に見つかる

プール掃除をやることになる

現在に至る

うん、自業自得だね

ぼくは間違つてなかつた

「久遠、プールだがお前も来るか？」

「え？ 行つていいの？」

「もちろん行くけど・・・」

「後は島田と姫路だな」

そう言つて島田さんと姫路さんを呼ぶ

「雄一、優子も呼んでいい？」

「いいぞー」

さつそくメールを打つ

TO 優子

「送信つと」

休日学校のプールが使えることになったんだけど、行かない？

2分後返信が来た

From 優子

いいわよー

時間とかはあつて聞かせてね

「優子は来るつてさ

「おつ、分かつた」

そしてそしてまたもや休日

「おーい、優子、秀くん行くよー」

「「ひょっと待つて」」

待つこと3分

「せ、行きましょっか

「「そうだね（じやな）」」

プールかあいつ振りだらう?
楽しみだなあ

第一十一問 プール編（後書き）

書けなくなつてきた・・・

第一二一問

ぼく達がつく壇にはほとんど人が來ていた

「みんな、おはよう！」

「うせむる」

「秀くん、そういうえば、新しい水着を買つてたけど
ちゃんと、持つてきた？」

「さじ論無論、むう」

トランクスタイルだつたつけ？

「ちなみに、男物のトランクスタイルپじや」

あれ？ 2人ほどがつかりしてるね

タタタタタッ！

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわつ！？」

「 もう葉月つてば、アキがビックリしてゐるでしょ？」

島田さんの妹？

分人気が全然違つと思つのはぼくだけだらうか……

「 なんで、葉月ちゃんが来たの？」

「 家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃつて。どうしても
つこつくるつて駄々こねて聞かないもんだから……」

と、島田さんがため息交じりに呟く

「 いじんじやないの？」

「 それもそういうだけ……あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが
最後だと思つたのに」

「 いえ、もう来てますよ？ 今職員室にかぎを借りに行つて……あ、
丁度戻つてきたみたいです」

瑞樹の説明の最中に、校舎の方から雄一と翔子が歩いてきた。

「 おはよう雄一、霧島さん」

「 おひ。さうんと遅れずに来たようだな」

坂本夫婦の登場ですね

「 代表も来てたんだ」

「 ・・・・優子、今日は雄一と楽しまないといけないから」

「 さてと、着替えるか」

「やつだね」

雄一の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。

瑞希と美波、優子は翔子に。

明久と久遠とマッシローーと秀吉と葉月は雄一に。

「……ん? じりじり、葉月ちゃんと秀吉は向いりでしょ? 霧島さんについて行かない」とダメだよ」

「えへへ。冗談ですわ」

「ワシは[冗談じゃな]のじゃが……?」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀くんだった。

「せひ、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田! ? ついにお主までそんな田でワシを見るよ! ? ! ? 」

「ちょっと島田さん! 秀吉は……」

「あの……それなら、木下君は一人でどこか別の場所で着替えるつてこいつのはじりですか?」

と、おずおずと手を挙げて提案する姫路わん。

ところより、自分の常識がことじく無視されてる事に、頭を抱える優子。

「……秀吉、あんた女って認識されてるつて言ひ話、本当なのね?」

プールサイド

「久遠つて意外に筋肉あるよね」

「うん、毎日筋トレとランニングやつてるからね」

たまに、秀くんと一緒にやつてます！

「あれ？誰か来てみたいだよ？明久」

とたとたと走ってきたのは紺色のアレを着た島田 葉月であった

「ジジジジジジジジジ「しよう久遠！？ あれってスクール水着だよね！？ そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな！？」

「…………弁護士を呼んでほしい（ボタボタボタ）」

「あんな…………落ち着け2人とも。小学生の水着姿でそこまでとりみだすな」

「なんで、そこまで取り乱すのー？」

雄一の冷静な突っ込みと久遠を驚きの声が響いた

「お兄ちゃん達、お待たせです」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月。
2人はある程度冷静になる様に……。

「懲役は2年程度で済みそうだね」

「…………実刑はやむおえない（ボタボタボタ）」

……いや、冷静ではなかった。

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

「」「葉月つ！」

奥から島田さんが胸元を隠し怒りながら走ってきた

「お姉ちゃんのソレ、勝手に持つていったらダメでしょ！？　返しながら！」

「ソレ？　……何のことだろ？？」

「あうっ、ズレちゃいました」

「ん？　今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けていた胸パツ……」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」

「ダメだよ！　その一撃で明久が死んじゃうから！」

「久遠、あんたも苦労しているんだ・・・」

「あ、優子」

優子に一瞬見とれてしまった

優子の水着は白のワンピースタイプだった

「に、似合つかしら？／＼／＼

「う、うん凄く似合つてるよ／＼／＼

「　　あの2人は相変わらず惚気てるんだな（だね）」「　　

周りの人たちの声はぼく達に聞こえなかつた

第一一二三問 平和は来ないのですか！？

えつと、なぜ、秀くんは女物の水着を着ていて、そしてもって、明久と康太が倒れていて、雄一は眼つぶしをくらっているんだろう？

「なんか、力オスだね」

「久遠、胃薬ないかしら？」

「あるよー」

「あるの！？」

「ぼくも、ちょくちょく痛くなるからね」

ええ、ぼくは1週間の内5日間は胃が痛くなります

「くれるかしら？」

「はい、水と薬。

あ、水はぼくの飲みかけだけどいいかな？」

「うん、いいわよ」

優子が薬を飲み終わり、みんながプールで遊んでいた
ちなみにぼくは、パークーをはおつてます

「ぼくも、泳ぐかな？」

「いつてらつしゃい」

プールに入り、泳ぎだした

その時、明久が霧島さんを呼んで話をしていた

次にぼくは目を疑つたね

だつて、霧島さんが、雄一を沈めているんだから・・・

「明久アアア！！」

「てめえの仕業だろー！！」

「ヒイ！霧島さん早く沈めて！！」

明久と雄一と翔子の戯じつーつて名前がつきそうだね・・・

「優子、また始まつたね」

「この人たちには平和がないのかしら？」

「あつても、一時期だけだよ・・・」

「あれ？代表に優子？」

「この声は？」

「愛子どうしたの？」

「今日部活があると思つたら休みだつたんだよね
ところで、ボクも混じつていいくかな？」

「いいんじゃない？」

工藤さんも、遊ぶことになりました

「・・・・優子、ビー・チバレーしよ？」

「いつていかしら？」

「うんいつてきなよ

優子と霧島さんが走つて行つた

ん~、暇になつちゃたなー

雄一と明久はあいかわらず喧嘩してゐるし・・・

「秀くん」

「む、久遠がどうしたのじゃ？」

「暇だから、話しあない？」

「いいのじゃ」

秀くんと雑談していたら突然「久遠は姉上の事をどうおもっているのじゃ？」

「ど、突然何言つてるの？」

「付き合っているんじゃろ？ほれほれ言つてみるがよい」

秀くんに弄されました

「そうだね、思い返せば、ぼくの初恋の相手は優子だったね。多分、ぼくは優子の笑顔に惚れたと思つ。

一番、幸せそうな優子の顔を見るのが今のぼくの楽しみだつたりもするからね」

「ほう」

秀くんも真面目に聞いてる

「あと、失敗した優子の顔を見たら、なんとかしてやりたいって気持ちにもなるかな。

厳しい性格だけど、ときより優しさを見せるとこが一番好きだつたりするよ」

ぼくが言い終わると、秀くんはニヤニヤしていった

「お主もやるのう。本人がいる前で平然と好きなところ言つてるんだからの」

「えー？」

後ろを振り向くと、優子と霧島さんと工藤さんがいた

「優子、愛されているね」

「…………私も雄一に言われたい」

「…………／＼／＼」

三者三様の答え

優子はめっちゃ顔を赤くしてたけど

後から考えると、恥ずかしすぎる

「秀くん、どこか穴ないかな？」

今すぐ潜りたい！！

「お、落ち着くのじゃ久遠ー！」

結局、ぼくたちのところにも平和は訪れませんでした

「久遠！－！ちょっとこい！」

あれ、お前が血相變えて呼んでる

もしかして、婚姻届が出された？

諦めなよ。雄一、霧島さん何の」と好きなんだしょ。」

—平然とありそへなことを書へな!!

第三章 人物

さりげにスルーしたな・・・

まあいい、姫路がワッフルを作ってきたんだが・・・

雄一がハキハキ話さない

「どうしたの？」

姫路の料理はな、薬品が入ってるんだ。・・・

ぼくの幻聴かな？

「だから、薬品が入ってるんだよ」

卷之三

「水泳対決で決めるんだがお前も入れ！」

「ぼく死ぬのはいやだよ！」

「大丈夫だ！1位と2位は食べなくていい」

「わかつたやつてやるさーー！」

N o s i d e

さあ始まりました水泳レース！

おつと実況は私、神龍がお送りします！

久遠、康太、秀吉の三人は早くも折り返し地点

明久、雄一はドつきあいのけんか中！！

おつと、ここで明久は秀吉、雄一は康太のレーンに入つた！！

『ズルッ』ここで明久の手が秀吉の水着の上の部分にかかつたあ

！！

康太：戦闘不能

明久：興奮状態

秀吉：驚きを隠せていない

雄一：康太、救出中！

久遠なにもしらず「ホール

S i d e o u t

えっと、ぼくが一位でゴールした頃、プールの三分の一は血の色で染まつていました・・・

「優子、救急車宜しく・・・」

「分かったわ・・・」

月曜日

明久と雄一が西村先生に追いかけられていきましたとさ

～おしまい～

第一二三問 平和は来ないのですか！？（後書き）

次から、強化合宿編か閑話かのどちらかです

第一十四問（前書き）

駄作にもほどがある・・・

第一十四問

「「ケンカしたあ！？」」

「うん、昨日優子とけんかしたんだ・・・」

「壮絶な言いあいじゃったのう・・・」「で、なんでケンカしたんだ？」

「それはね・・・」

日曜日

ぼくが優子と秀くんの家に行っていた

「久遠、紅茶とコーヒーどっちがいい？」

「コーヒーがいい

あ、砂糖多めで」

ソファに座りながら返事をする

「ハア！？普通は微糖でしうが！！！」

「いいや！甘アマの方が絶対いい！！！」

「ふ、一人とも落ち着くのじゃ！？」

「秀くん（秀吉）はだまつてて！！」

「わかったのじゃ・・・」

30分間討論を繰り広げた

「「最高にへだいらねえ（なこ）よーー。」」「怖かつた、ものすゞぐ怖かつたのじや・・・」

「みんなひどいよーせつかく相談してゐるのこーー。」

「つるせえ、なんで「一ヒーでそこまで喧嘩になるかが知りたいわ

！」

「男には譲れないものがあるんだよーー。」

「使いどころさえ、間違えなければ最高の台詞だなー。」

「まあまあ、おちつこいで。」

「雄二」、一回落ち着いて、君とまでけんかはしたくなー。」

「同感だ」

話し合いの結果ぼくが謝ることになりました

「ねえ、秀くん」

「なんじや？」

「優子は許してくれるかな？」

「きっと、許してくれるじゃろ」

優子に許してもらえたかったら・・・

優子 side

はあ・・・

昨日、アタシと久遠は喧嘩してしまった・・・

「あれ？ 優子どうしたのそんなに落ち込んで？」

「あ、愛子か

話聞いてもらえたるっ！」

「ボクでよかつたら相談相手になれるよ」

「うん、実はね・・・」

愛子に説明したら、最初は驚いていたけど、最後には笑われていた

「ちょっと、愛子ー」

「真剣に考えてよー！」

「「」「ごめん、でも」「コーヒーの砂糖の量で喧嘩とか・・・ふははは」

愛子は涙を流しながら笑っている

「影田君とそんなことでケンカするなんて

ある意味すごいね優子達」

「で、ここから相談なんだけど

久遠に謝りうと思いつのよね」

「うんうん、そうしなよ」

「許してもらえるかしら・・・」

「当たつて碎けろだよー！」

「砕けちゃ駄目だと思うんだけど・・・」

優子 side out

ただいま、Aクラスの前に来ています

「し、失礼します、Fクラスの影田だけど、優子はいるかな？」

「木下さん！彼氏が来たよー！」

はずかしいよ！

優子が来ました

「な、なに？」

「ちょっと、話しあない？」

「いいわよ

ぼくたちは屋上に行つた

「「優子（久遠）」」

「えっと、優子からビリードル」「さりげない

「久遠から言つていいわよ?」

「わ、わかった・・・」

ちよつと間を置く

「ふう、優子、昨日はごめんぼくが悪かった!」

ぼくは頭を下げた

「く、久遠・・・

いいわよ、アタシも謝りたかったし、それと聞い過ぎたし

「ゆ、許してくれるの?」

「アタシが許してほしいくらいよ!」

「・・・・・」

沈黙が流れた

「「「「「ふはははははは」」」」」」

ぼく達は笑いだした

「ぼく達ってなんか似た者同士だよね

「ええ、そうね

ぼくと優子は昼休みが終わるまで笑っていた

第一十四問（後書き）

感想待つてます

第一十五問 こぞり、強化合宿！

雄一「機械オノンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入つてるんだ？」

翔子「……雄一、酷い……」

雄一「よつと……ふむ、MP3プレーヤーか」

翔子「うん」

雄一「翔子、手をつなごう」

翔子「……別に何も」

雄一「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。んで、今背中に隠した物はなんだ？」

翔子「……誘導尋問は卑怯」

雄一「まだ何も言つていないぞ？」

翔子「……隠し事なんてしていいない」

雄一「翔子」

翔子「……普通の音楽」

ピッ 《優勝したら結婚しよう。愛している。翔子》

雄一「……」

翔子「……普通の音楽」

雄一「これは削除して明日返すからな」

翔子「……まだお父さんに聞かせてないのに酷い……。手もつないでくれないし……」

雄一「お父さんってキサマ これをネタに俺を脅迫する気か?」

翔子「……そりぢゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらひだけ」

雄一「翔子病院に行いつ。今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

翔子「……子供はまだできないと思つ」

雄一「行くのは精神科だ! ん? ポケットにも何か隠していないか?」

翔子「……」これは大したものじゃない

雄一「え?、なになに!』私と雄一の子供の名前リスト』か……ち

みつと待てや」「

翔子「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

雄二「『しょひい』と『ゆひじ』で『しょひゆ』か……なぜそこを組み合わせるんだ」

翔子「……ちと味のある子に育つと思ひ」

雄二「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

翔子「……ちなみに、男の子だつたら『いしょひ』が良い」

雄二「『しょひゆ』って女の名前だったのか……」

明久 side

新学年になつてから早いもので、力用がたつた
進級して2日で久遠が転校してきたりして、新しい出会いもあつた

「あ、秀吉に久遠、木下さんおはよう」

「明久（吉井君）おはよう」

久遠は木下姉妹と幼馴染で姉の優子さんと婚約者の関係にまでなつていた

校門をくぐり、下駄箱を開けた

そこには一通の手紙が入つていた

《吉井 明久様へ》

可愛らしい便せんだつた

(二)、これはラブレターかな！？)

僕は開封した

内容は・・・・

『あなたの秘密を握っています』

「最悪じゃああ！！」

思わず叫んでしまった

「ど、どうしたの（じや）！？」

「どうしよ、僕に脅迫文が届いてしまったよ・・・」

僕は凄く落ち込んだだが、だが久遠だけは違つかつた

「災難ね」木下さん

「内容はどのような物じや？」秀吉

「今までの行いが戻ってきたね」

「久遠、心配してよ！」

「はは、ごめんごめん、雄一がいないから流れで言っちゃつたよ

久遠もFクラスに染まってるのかな？

そして、僕はムツツリーに相談してみた

明久 side

久遠 side

朝から、面白い展開になつてますね

明久が脅迫文か・・・

多分、雄一にもなにがあるかもね
おっとHRが始まりました

久遠 side out

「さて、明日から始まる『強化合宿』だが、大体の事は配ったしおりに書いてあるので確認するように。まあ旅行に行くわけじゃないので、筆記用具と着替えがあれば問題ないが。
集合時間と場所は間違えないように」

西村先生のドスの利いた声がFクラスに響き渡る

集合の時間と場所を間違えたらシャレにならないし、他の人の迷惑にもなる

「特に他のクラスと間違えるなよ

AクラスやBクラスはリムジンバスだったりする

Fクラスは先生が引率するだけかもしれない

「いいか、他と違つて我々Fクラスは 現地集合だからな

『『『案内すらねえのかよつ！？』』』

Fクラスの叫びは学校中に響いたと言つ

第一十五問 ござ、強化合宿！（後書き）

かんそー待つてマース

第一十六問（前書き）

こつもよつと長めです

第一十六問

影月久遠の強化合宿、一日田の口記
『電車を降りると、綺麗な山や畑、田んぼがあつたりして、昔の北海道にいたころを思い出しました。都会の雰囲気も好きだけど、ぼくは綺麗な空氣がある田舎が好きです』

教師のコメント

影月君は、この学校に来る前は北海道の田舎の方にいたそうですね。昔の事を思い出せてよかったです。あと、なぜ君のような人間がFクラスにいるのかが知りたいです

電車内

車窓を眺めると、だんだん都会の雰囲気から田舎の雰囲気に変わつ

ていた

1時間の移動で物凄く、景色も変わったりしていた
「あと、2時間ぐらいはこのままでですね」

明久の正面の姫路さんが捜査していた携帯をポケットにしました
ちなみに席順は

雄二 須川

秀くん 康太

明久 ぼく

姫路さん 島田さん

そしてそして、心理テストが始まった

Q 緑、オレンジ、青で連想する異性を答えてください
久遠の答え 緑 工藤さん オレンジ 優子 青 優子
美波のコメント 木下さんが羨ましすぎる！
秀吉のコメント 姉上よかつたのう

明久の答え 緑 美波 オレンジ 秀吉 青 姫路さん
美波のコメント 怒っていたため、取材班は断念しました
秀吉のコメント なぜ、ワシの名前が挙がるのじゃ！？

こんなふうに楽しんでいました

ぼくは途中で睡魔に負けて寝ちゃつたけど

まあ、合宿所についたんだけど・・・

明久が気絶してるし！

しかも、前世の事を懺悔し始めてるし

訳が分からない・・・

明久が目覚るきっかけはAEDだった
どこまで、危険だったの！？

「ここには合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。この旅館文月学園が買いつ
て合宿所に作り変えたらしいぞ」

へえ、そんなに金持ちなんだこの学校

まあ、注目されてるからそのぐらいは普通かな？

「む、明久、無事じやつたか！良かつたのう・・・。お主がうわ
い」とで前世の罪を懺悔し始めた時はもうダメかと・・・。

秀くんが入ってきて、胸をなでおろしてますね

明久の生命力はG並みですからね

Gとは、あれだよあれー黒くてカサカサと言ひやつたよ

「心配してくれてありがとう。秀吉も一緒に部屋なんだね？」
「つむ、ムツツリーーも含めた5人一緒にじゃ」

見渡すと、8人は疲れそつた部屋

ここに5人とは

問題児をひとつに固めたのかな？

ぼく、問題起こしたかな？

・・・・・・・・

起こした記憶がない！！

おっと、康太が帰ってきました
どこに行つてたのかな？

「おかえり、ムツツリーー！」

「・・・・明久、無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

まあ、生死の生命線をたどれば、雄一でも心配すると思つけどね

「・・・・情報が無駄にならなくて良かつた」

「情報？ああ、昨日俺と明久が頼んでいた奴か。ずいぶん早い」

「・・・・昨日、犯人が使つたと思われる痕跡を見つけた」

「おおつーさすがムツツリーーだね」

「・・・・手口や使用器具から明久と雄一の件は同一人物の犯行
だと断定できる」

「そうなのか、まあ、こんなことをする奴なんてそんなにいないから断定できるか」

「んー、なんでだろ？」

ムツツリーーと犯人がいるだけで充分おかしいと思う

「それで、犯人は誰だったの？」

「・・・・（フルフル）」

「すまない、『犯人は女子生徒でお尻に火傷の跡がある』ことぐら
いしか分からなかつた

「「君は一体何を調べたんだ?」」「
ぼくと明久の声が重なつた

「・・・・・校内に網を張つた」

そう言いながら小さな機械を取り出す康太。あれは……康太がいつ
も使つてる小型録音機。

「これは?」

「…………小型録音機。昨日学校に盗聴器を仕掛けた」

ピツ 『 らつしゃい』

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろ? 音質や制度にこだわ
る余裕はないからな」

「それにしても『らつしゃい』か。声からして女子なのに、八百屋
のオッチャンみたいに言つんだな」

音が悪い為人物の特定はできないが、女子だといふことがわかる。

『…………雄一のプロポーズを、もう一つお願ひ』

こつちは霧島さんだね

「しょ、翔子……！ アイツ、もう動いていたのか……！」

「よつほど早く手にいれたいんだね」

『毎度。一度目だから安くするよ』

『…………値段はどうでもいいから、早く』

『流石はお嬢様、太つ腹だね。それじゃあ明日 と言いたい

ところだけど、明日からは強化合宿だから引渡しは来週の月曜で』

『…………わかつた。我慢する』

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かつた……」「タイムリミットが来週の月曜まで伸びたね」

「…………それで、こっちが犯人特定のヒント

康太が機械を操作する。

『相変わらず凄い腕前だね。でも、このまえ母親にバレてお灸を据えられたんでしょう？よく続けてやれるよね』

『ああ、文字通りお尻にやられたよ。全くいつの時代の罰なんだか。まあ、この程度じゃ乙女の心は止まらないけどね』

『それはまた……バカだね』

『その口調の君に言われたくないね。でも未だに火傷の痕がお尻に残ってるんだよ。なにか早く治すいい方法知ってるかい？』

『知ってるけど教える気はないよ。面倒だしね。自然治癒に任せればいいんじゃないかな？』

『……その口調でも性格はまるで変わらないんだね？まあ、放つておけばそのうち治るか』

「…………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「今会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居かかっていたけど女子なのは間違いないだろうね」

「犯人を特定できる有益な情報だけど、お尻の火傷か…………。仮にスカートを捲つてまわったとしてもわからない可能性があるし、ううん……」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ…………」

「流石に身体測定のデータのなかにも『お尻に火傷の痕がある』って載つてなかつたし……」

真顔で女子のお尻を覗く会話をしている

ぼくは話についていけなかつた

「お主ら、やつきから何の話をしておるのじゃ？」

と、今まで側で話を聞いてるだけだった秀吉が声をかけてくる。

「秀吉、実はね

（以下略）」

事情を知らなかつた秀くんに明久が簡単に説明する。

「やつじやつたのか。それにしても、尻に火傷とは……」

真剣に尻を見る方法を考える人が増えた

「やうだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見えてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子プロに入ることが前提になつておるのじゃ？」

「というか無理だからな明久

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと

「しおりの3ページ目を見てみろ」

秀吉の言葉を遮つて雄二がしおりを明久に放りながら言つ。確か3ページ目に書いてあるのは……

（合宿所でも入浴について）

・男子A B C クラス	2 0	・ 0 0	・ 2 1	・ 0 0	大浴場
・男子E D F クラス	2 1	・ 0 0	・ 2 2	・ 0 0	大浴場(男)
・女子A B C クラス	2 0	・ 0 0	・ 2 1	・ 0 0	大浴場(女)
・女子E D F クラス	2 1	・ 0 0	・ 2 2	・ 0 0	大浴場(女)
・Fクラス木下秀吉	2 0	・ 0 0	・ 2 1	・ 0 0	個人風呂?

「…………くそっ！これじゃ あ秀吉に見てきてもらうことができないー！」

「そういうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

秀くんはいつも女扱いをうけるよね

ドバン！！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

第一十六問（後書き）

感想待つてます

第一十七問 日常（前書き）

途中から、番外編です

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

急に部屋のドアが開いて女子が入ってきた

その中には優子や霧島さん、姫路さんと島田さんもいた

女子風呂に盗撮用のカメラがあつたらしい
ぼく達の田代さんの行動から、疑われてもおかしくはなかつた

ぼくは、正座をしていた！

「久遠、覗きはダメでしょ！」

「優子、ぼく達は盗撮なんかしてないよ・・・

大体、優子がいるのに盗撮なんてする意味がないし（小声）」

「えつ！？／／／

「え？ 聞こえてた！？」

「うつ、うん、そのありがとね
アタシは久遠の事を信じるよ」

「ありがと」

ぼくと優子は正座で向かい合いながら赤面していた

「・・・・雄一、盗撮はいけない」

雄一は霧島さんに

「アキ、覚悟しなさいよ！」

明久と康太は拷問を受けていた

「ひどい言いがかりじゃ のう」

雄一は下を向いて、怒りを表していた

「上等じゃねえか。あつちがそつくるなら俺らも覗いてやるうぜー！」

雄一は立ち上がり叫ぶ

明久と康太、秀くんも賛同するけど

「みんな、悪いけどぼくは降りるよ」

「な、なんでだ！」

「優子の事は裏切りたくないし・・・」

「あ、そうだつたかしゃあねえな

久遠なしで行くぞ！」

時刻は8時となり、雄一達は出て行つた

(みんなに悪いことしたなあ)

罪悪感を覚えた

その夜、雄一達は朝に帰ってきた

なんとなーいじで久遠の口常

「うん！行つてきまゆ」

AM 6：30

ランニング終了

「ただいまー」

「おかげり

「さて、朝の勉強でもするかなー」

AM 7：30

勉強終了

「んーーー！終わった」

ぼくは、この時間になると学校に行く準備を終え、歌を聞きまや

AM 7：45

登校

「母さん、行つてくれるねー

「いつてらつしゃい

AM 8時

学校到着

「西村先生、おはようございます

「ん？影月かおはよー」

「重そうですね？」

ひとつ持ちますよ？」

西村先生は段ボールをひとつ抱えていた

「む、すまないな

「いえいえ

「ハア」

西村先生がため息をついた

「どうかしましたか？」

「いや、なんでお前みたいなやつをFクラスにやったのかなとおもつてな」

「ぼくはそれなりに楽しいからいいですよ」

こんな感じで話しながら行きました

8：30

H R 開始

「 これでH R を終わる」

と西村先生の言葉と同時にFFF団（明久は除く）が出動！
ぼく対FFF団の死合が始まった

「ふう、おわった」

「おつかれさまじや」

「あ、秀くんこの人たち口に口に強くなつてきてるよー
もう大変だよ」

「そう言いつつまた記録を塗り替へとるじゃねうが」

「まあねー

その後は何もなかつた

12：30

昼食が終わり昼休み
トイレからの帰りし

「あ、あの影月君」

「ん？ どうしたの？」

「ほ、放課後後者の裏に来てくださいーーー」

そう言つて女子生徒は走り去つた

昼からの授業

ポカポカと気持ち良い天気なので寝てしまった

放課後

(んー、やっぱり行かないダメだよね)

「あ、ごめんね遅くなつて

話つて何かな?」

「わ、私、Cクラスの

山中と言つます

影月君の事が好きです付き合つてください」

「気持ちは嬉しいけど、ぼくには優子がいるからね

「木下さん以上の女になつて見せますから!」

「ゴメン、ぼくの中で優子以上の女性なんていないよ・・・

「わ、分かりました」

山中さんは泣きながら去つて行つた

うう、女子の涙つて嫌だな

泣かせてるみたいだし・・・

今月は3人目か

精神的にきつい・・・

「ただいま

「あら、お帰りなさい」

読書タイムに入りました

・・・・

「久遠、夕食ができたわよー」

「うん、分かったー」

夕食を食べて、少しゲームをして、ぼくの日常は終わりました

第一十七問 日常（後書き）

感想待つてます

第二十八問（前書き）

作者、病気にかかっていました・・・

第一十八問

今日が合宿2日目も本格的な合宿となつていて、みんなも真面目に…

「…………雄一。一緒に勉強できて嬉しい。」

「待て、翔子。当然のように俺の膝の上に座るつとするな。エクラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている。」

真面目に……取りこんでいた

学習内容は基本は自由で自習だった

「でも、なんで自習なんだりつ？ 授業をやつてもここと思つた。

「なんで？ 明久は授業のほうが嬉しいの？」

「いや、自習のほうが気が楽でいいよ。やらなくともいいわけだし。

「

すこしあせの氣を出さつよ・・・

「授業なごやめるわけねえだろ、頭を使え馬鹿野郎。」

霧島さんから逃げるよつに来た雄一が話に入つてくる

明久、お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？

「むつ。失礼な。雄一は理解できないかもしねないけど、僕にとつ

てはAクラスもFクラスの授業も大差ないよ。」

「両方とも理解出来ないからって言わないよね？」

「そ、そんなことあるわけないじゃないか！」

目が泳いでる・・・

「・・・・・この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから。」

「なるほどね」

「????」

「翔子、それだけじゃ明久には伝わらんぞ。つまりだな、AクラスはFクラスを見て『あはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『あはなりたい』と考える。そういうメンタルの強化が目的だから、授業はさして問題じゃないということだ。」

霧島さんの説明に補足を入れる
息ぴったりだし

雄一が卒業したら即結婚かな？

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

「この声は工藤さんだつたかな？」

「えっと、工藤さんだっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だつたよね？ 久しぶり。

そつちの君はたしか優子の彼氏の影月君だね

「はづかしいから止めてほしい／＼／＼

平然と何を言い出すんだ

「それじゃ、改めて自己紹介させてもうつね。Aクラスの工藤愛子です。得意な教科は保健体育の“実技”。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はショーケリームだよ。」

特技のところはスルーしておこう

「ん？ どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その・・・・・」

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここでも披露してみせよっか？」

女子がする余話ではないと思つ・・・

工藤は自分のスカートの裾を摘んでみせた。

「あれ？ ムツツリーーーは随分と冷静だね。僕でもこんなにドキドキしているんだから、とっくに鼻血の海に沈んでるのかと思ってたのに。」

鼻血の海って聞いたことがないよ・・・

「・・・・・・・・・・ヤツは、スペツツを穿いているー。」

「な、なんだつて！？ 工藤さん、僕を騙したね！？」

「いやあ、そこまで残念がらなくていいと思うよ？」

それより可哀想なのは雄一だと思つたけど・・・

「うん、たしかにそうだね」

雄一は霧島さんに目を突かれていた

「影月君は優子のパンチラの方がいいの？」

「げふつ、いきなり何を言い出すんだよ！？／＼／＼

「ああ、図星か。まあ付き合つてるし当たり前か」

この子、油断できないね

「昨日は、優子に影月君の事いろいろ聞いたよ

頬を赤くしながら、話してたよ

「・・・・・ 優子、楽しそうだった」

「昨日、何あつたの！？」

「昨日の話聞いてたら、優子が惚れる理由もわかつちゃったよー

恥ずかしい

非常に恥ずかしい！

「あ、そろそろ最近これにこいつてるかな?」

そつ言いながら彼女が取り出したのは・・・・・小型録音機!?

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば

小型録音機をカチカチと弄る工藤。

少し間を置いて、内蔵されてるスピーカーから音声が聞こえてきた。

ピジ 《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしてるとだ

》《やらない?》

「わああああっ! 僕は『こんな』と並べてないよ! ? 変なものを再生しないでよ! ?

「ね? 面白いでしょ?」

工藤さんが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「・・・・ええ。最つつ高に面白いわ。」

「・・・・本当に、面白い冗談ですね。」

ゾクツ!

鳥肌が立つほどの殺意を感じた。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行く手伝つてもらえる?」

「わかりました。アレですね? 喜んでお手伝いします。」

その後戻ってきた姫路さん、島田さんの拷問は西村先生が戻つてくるまで続いていました

K、K君の感想
明久が可哀想でした
Y-S君の感想
目が痛すぎる
K-T君の感想
・・・・俺ならもつとつまくやれる
H-Kさん?の感想
ワシは男じや!
いつも通りじやつた

第一二十八問（後書き）

感想待つています

お知らせ

現在、新連載をさせてもらいました

タイトルは『バカと神童と召喚獣』です。

「こちらを主に行きますが、多少、今までより遅くなる」ともあるかと思いますが

暖かく見守つていってください

神龍

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

第二十九問

地獄のよつな勉強会、天国のよつな夕食が終わり、各自部屋に戻つていた

「久遠、頼むから来てくれ。」

「ぼくも協力はしたいけど、後の優子が怖いからね」

「頑張れば木下の裸姿が見れるかもしねないんだぞ？」

「優子の裸？・・・・・（プシュー――――――）」

「――久遠が処理落ちした！？」

明久 side

久遠が木下さんの裸姿を想像しただけで処理落ちしてそのまま、布団に寝かせてあげた

「わりい、まさかここまでなるとは思わなかつた」

「わしもじや。まさか想像だけで氣絶するとはのう」

雄二が謝り、秀吉が想像を越えたとつぶやいていた

「坂本、俺たちに話つて何だ？」

部屋に入ってきたのは須川君をはじめとした、Fクラスのメンツだった

「よく来てくれた。皆に提案がある」

部屋に入りきれていない、メンバーに聞こえるよつて雄二が言つた
『提案？』

『今度は何だよ。こいつらは疲れてるんだよ』

『早く部屋に戻つてダラダラしてえな』

全員がだるそうにしている

そんなことに焦りもせず、雄一はつづけた

みんな覗きに興味はないか?」

『くわしく囂かせろ!』

故の言葉に結束を見る所アラス

晴明の後、儀達は単刀の補強を完了し、風呂場へと進軍した。

田ノ川

「西村先生。流石に今日は現れないのではないか？ 昨日あれだけ指導しましたし」

現れます」

「そうでしょうか？いくらなんでもそこまでバカでは
はなんだ！？」

— T, T, T, T, T, T

大きな足音と共にエクスが登場していく

に、西村先生大変です！変態が編隊を組んできました！」

まさか、懲りるところが数を増やしていくとは。じれだからあの連中は・・・布施先生警備部隊に連絡を。私は定位置に着きます

!

「は、
せい！」

今日も教師部隊対Fクラスの戦争が始まった

明久 side

僕達は部隊をわけて進軍し、各班1つずつ教師又は女子生徒にぶつけ、主軍はどんどん進軍して行つた

「そこまでです。薄汚い豚共！この先は男子禁制の場所！おとなしく引き返しなさい！」

「し、清水さん！？とその他多数

「吉井、数も質もこっちが不利だ！」

誰かが弱音を吐く

「清水さん、お願ひだ！そこをどいてほしい」

「ダメです！お姉さまのペッタンコを堪能しようなんて、神が許しても美春が許しません！」

立ちはだかる清水さん

だが、美波に興味ないのになー

「違うよ！僕の目的は美波のペッタンコなんがじゃないんだ！信じて！」

「ウソです！お姉さまのペッタンコに興味がない男なんていません！」

「本当だよ！ペッタンコはしょせんペッタンコなんだ！今の僕は地平線のようなペッタンコより大事なことが右ひじがねじれる様に痛いいいいいいいい！！」

「黙つていれば人の事をペッタンコペッタンコと何度も！！」

言い争いに夢中で美波が近づいているのに気がつかなかつた

ホントやばい！痛すぎる！！

「ヤツホー 吉井君。何を見に来たのかな？ボクを覗いてくれるならうれしいけど」

次々と登場する女子たち

「久遠、おとなしくしなさい！」

その中に久遠を呼ぶ木下さんがいた

「ああ、木下」

「何よ？」

雄二が罰を悪そりに言つ

「久遠を誘つたんだ」『う』言つてな『木下の裸が見れるかもしねないと』つて言つたら処理落ちして氣絶した

「『』『』・・・・・」『』『』

沈黙が走つた

「久遠はどうしてるの？」

「部屋で寝てる」

「分かつたわ、行つてくる」

木下さんはそう言つて僕達の部屋に向かつた

その後は、言つまでもなく作戦は失敗またもや補習室に入れられた

久遠 side

ぼくが目を覚ますと優子が近くにいた

「えつと？優子？」

「どうしたの？」

「どうしたの？」

「なんでここにいるの？」

素直に思った。時刻は9時で入浴時間は終わっているが雄一達がないことを考へるとまた失敗らしい

「あんたが気絶してるので聞いて来てみたの」「えっと、理由は聞いたら？」

「うん」

おそらく僕は耳まで赤くなっているだろう

優子は頬が少し赤いだけだった

「・・・・・」

沈黙が流れた

その後は優子に「なんで、想像だけで気絶するのよ」って笑われながら言われた
ぼくは沈黙を貫くしかなかつた・・・

「優子、頼みがあるんだけど」

「雄一達に力を貸してもいい?」

質問の後サブミッションに掛けられました

後で、理由を言つたら納得してくれたけど・・・

久遠 side out

第一十九問（後書き）

そろそろ、無理かも・・・

第三十問

「あ、西村先生おはよひ」「やれこませ」
「ん？ 影用か、おはよう。
どこへ行くのだ？」
「日課のランニングです。
あ、でも行つてきてもいいのでしょつか？」
「普通は、ダメだがお前なら別に問題ないだろ？」
「有難う」「やれいます」
「気をつけるんだぞ」
「はい」
一礼して外に出た
そして、いつもよりは短いけどランニングをした帰つてきた
「寝落ちかよチクシヨー！」
とゆう明久の叫びが聞こえた後に
「殺す！ こいつの耳からどす黒い血が出るまで殴り続ける……」
何やつてんだろう・・・
ぼくは寝室のドアを開くと
明久が花瓶を持っていてそれを止めてる秀くんがいた
「・・・何やつてんの？」
「ん？ ああ、久遠がどこに行つてたの？」
花瓶を下してぼくに問う
「日課のランニングだよ。部活なにもやつてないからね
筋肉だけは維持できるようにしておかないと
「む、ワシも行つておきたかったのじや
「はは、『めんね氣持ちよさそうに寝てたから

「別にいいのじゃ」

ぼくたちは着替えて、朝食を食べに行つた

「雄一。そういうえば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん?なんだ?」

ぼくたちは食堂に移動して、朝食をとる

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかっていないカメラが一台残つている』って言われたよ」

「なんだと?」

忙しなく動いていた雄一の箸の動きが止まる。

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やつぱり彼女が犯人じゃないかな?」

「いや、そうとは限らんじゃね。それなりにわざわざ隠しまれるようなことを言つとは思えん」

雄一に代わつて隣にいる秀吉が答える。確かに工藤が犯人だと断定するには証拠が少なすぎる。

「…………確認するしかない」

「やつぱりそれしかないか…………」

この人たちには覗きとゆう方法しかないのかな?

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え? カメラが残つているつてことが?」

「ああ。それを工藤しか知らないつてことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

「…………隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

「自慢げに言つことじやない・・・

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ?」

「違うよ。最初にカメラが見つかること 자체がおかしいんだ」

「そうだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなると」

「…………二段構え」

「最初のものはカモフラージュとぬりつことになるね」「用意周到じやな」

「最初のカメラで油断さし、本命のカメラで撮影か……手の込んだことをするね

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りに行けば解決つてことだね」

「…………それは無理」

「…………時間外だと脱衣所は厳重に施錠されている」

「初日のカメラだね。そんなことになつてるんだ

「諦めて今までどおりの方法を貫けつてことか……」

「そのようじやな」

明久曰く、女子が守りに回つてたみたい

「…………敵側に工藤愛子もいた」

「工藤さんも守りがわか。Aクラスに守られるときついね

「そうだ。昨日の敗因はAクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

「ぼくたちも増やすんだよね？」

「その通りだ。お前はどこかのバカと違つて頭の回転が速くて助かる」

時間は飛び、VS教師軍団第三回戦が始まった

第三十問（後書き）

合宿編が終われば、オリ話を入れて終わりにしようと思います。

続ける可能性もゼロではありません・・・

第二十一問（前書き）

ながれいつなつた・・・

第三十一問

結局、手を貸してくれるのは、Eクラスとロクラスだけだった。
Cクラスは代表が小山さんだし、Bクラスは根本君だからまとまりがない

明久はAクラスの久保君を説得に向かつたけどダメだった。

時刻は20：00

「そろそろ、時間だからいこっか」

ぼくたちが立ちあがつたところに須川君が飛び込んできた

「吉井大変だ！」

「須川君どうしたの？作戦開始までまだ時間はあるけど」「やられた。大食堂に待ち伏せされていた！そして、戦力は分断されている！」

「な、なんだつて！？」

「雄二、霧島さんすごく怒つてるとと思うよ？」

「あ、ああまさかばれるとは思つてなかつた・・・」

「相手は雄二の事を大好きな霧島さんだから考へてることが分かつたんだと思うよ」

「雄二！どうするのさ！？」

「しゃあねえ、出陣だ！」

「「「「了解！」」」

部屋を駆け出し、大浴場へと向かう途中「優子たん。はあはあ」と
か言つてる輩がいたのでボコボコにしておいた。

敵陣を抜け駆けそして大浴場のある一回に着いたが

「雄二、来るのを待っていた」

雄二の嫁、姫路さん、優子に工藤さん。高橋先生までいた

「翔子、やつてくれたな」

雄二の歯ぎしりが聞こえる

これは悔しいだろう

とつたの判断で向かつた先に一番厄介な相手がいたのだから・・・

「ぼくは、高橋先生と優子とやるよ。

ちょうど、2人とやつてみたかっだし」

「へえ、久遠やる気あるのね?」

「影月君、君には失望しました」

2人の言葉を軽く無視した

「雄二、明久行きなよ」

「わかつた」

「させません!」

「おつとここからはワシらFクラスが相手じゃ!」
秀くんとFクラスのみんなが駆け付けた

「・・・工藤愛子勝負」

「ムツツリー二君負けないよ?」

康太と工藤さんが勝負する

「二人してかかつてきなよ!..」

『Fクラス	影月久遠	総合科目	17048点
高橋女史	総合科目	7791点	
Aクラス	木下優子	総合科目	4185点

ぼくVS高橋先生、優子の勝負が始まつた

第三十一問

『Fクラス 影月久遠 総合科目 17048点
高橋女史 総合科目 7791点
Aクラス 木下優子 総合科目 4185点』

「……驚きすぎて、声も出ないわ」

キンキンガンキン！

「あはは、なんか頑張つたらとれたんだよねー」

「生徒に負けた・・・・」

ぼくと優子は切り合いをしてるけど、高橋先生は○○状態だった

ぼくは構えを解き、戦う意思がないことを優子に表した。

「ちよ、久遠！？」

「何やつてるのよーー！」

「（チヨンチヨン）」

ぼくは優子の後ろを指さした

優子の後ろには鉄人や霧島さんに姫路さんそして多数の教師人と土

下座しているFクラスのメンツ
雄二、明久は立つてゐるけど・・・

『『『すいませんでしたーーー』』』

「優子、ぼくも補習室に行つてくる」

「大変ね・・・」

「まあ、明日もあるしね。」

優子と高橋先生との勝負楽しみにしてるから

「アタシも楽しみだわ！」

優子に背を向け、補習室に行つた

補習室にて・・・

「ハア、影月。」

「なんでしょう？」

鉄人は溜息を吐きながらぼくの名前を呼んだ

「お前まで、参加するとは思ってなかつたぞ」

「ぼくは、優子と高橋先生と勝負をしたいだけですから

「お前はいつから戦闘狂になつたんだ」

「そんなんじやないですよ」

夜中まで補習はつづいた

第三十二問（前書き）

めっちゃ更新遅れたorz
しかもぐだぐだorz

第三十二回

盗撮犯を見つけるチャンスも後1回となり
日に日に戦争は拡大して行き、今日は本当の意味で男子対女子+教
師が行われようとしていた。
優子が西村先生に掛けあつてくれて、ぼくは無罪みたいな感じにな
つている

夜

「雄一、AクラスとBクラスは勧誘できた?」
「Bクラスは大丈夫だが、Aクラスは分からない」
「そつか、でも、最後だから見つけないとね・・・雄一はそのま
ま結婚すればいいと思うけど」
「久遠!聞こえてるぞ!」
「なんのことかなー」
まあ、いつも通りの時間だった
「うし!行くぞ!!!」
「「「うんーーー」」「
しゅつぱーーつ

3F

女子はEクラス男子はDクラスの面々だった
ぼくたちはそこを通り2Fへ進軍した

そこには優子のことを思い浮かべている変態がいた

『優子たん。はあはあ』

「・・・・・」

「「「（ゾクッ！）、やばい久遠が切れた！）」「」「

ザシユ！！

なぜか、腕輪を使い

変態×5を瞬殺し、次いでに相手をしていた、女子生徒も倒した

「「「（・・・・・点数の無駄使い！！）」「」「

階段前

そこには優子と高橋先生が立っていた

「みんな、先に行つて」

「で、でも久遠！」

「・・・・・行くぞ、明久

久遠、後から追い付けよ」

「もちろんだよ」

皆は1Fに向かつた

優子と高橋先生は道を開けて明久達を通した

「さあ、始めようか！…」

「「「サモン！」「」

『Fクラス 影月久遠 総合科目 16548点

高橋女史 総合科目 7791点

Aクラス 木下優子 総合科目 4185 点

「ねえ」

「な、何かな？」

「なんで、昨日より点数が減つてんのよ！」

「変態を蹴散らしてきましたから！」

「あ、そ、う、な、ん、だ、」

なんか無駄に納得された

「始めようぜー！」

集中ver（田は閉じてないが口調が変わる）

優子と高橋女史の連携は凄かつたが久遠の点数と操作技術で一進一退を繰り広げた

「はああああ！－！」

優子がランスで突っ込んでくる

俺はそれを避けると後ろから高橋女史の鞭かきた
それを飛んで避け、召喚獣の体が逆さに向きながら、サブマシンガ
ンで2人に打つ

ようはバクテンをしながら銃を打つ感覚。

その攻撃にかかれる程度だった

『Fクラス』
影月久遠
総合科目 16418点

高橋女史
総合科目 7728点

Aクラス 木下優子 総合科目 4101 点

景用春に手が無勢で、持てども

「アーティスト、アーティスティック」

バンツバンツキンツパシツ

お互いの点数は半分になっていた。

「久遠、強いわね」

「それは、優子もだろうが」

『Fクラス 影月久遠 総合科目 8266点』

高橋女史 総合科目 3890点

Aクラス 木下優子 総合科目 2100 点』

高橋女史の集中力が薄れていた

俺はそれを見逃さなかつた

グサツ!!

高橋女史に腕輪の能力を使い、心臓付近を刺したとおもった

高橋女史は辛うじて急所を外した。

そして、鞭を振るいまともに当たつてしまつた

『Fクラス 影月久遠 総合科目 4206点』

高橋女史 総合科目 1790点

Aクラス 木下優子 総合科目 2100 点』

ほぼ一緒の点数になつていた

「こりや、同じ点数だつたら、俺は死んでるなー!!」

「2対1だから仕方ないんじやないの!!」

太刀VSランス

打ちあいながら会話している

『Fクラス 影月久遠 総合科目 3790点』

高橋女史 総合科目 1790点

Aクラス 木下優子 総合科目 1804点』

「そろそろ、最後にすつか!

時間もねえしな!!」

マシンガンを捨て、太刀だけを構える

優子と女史もそれにあわせて、今日一番の顔をしていた

ガチン！！
3つの音が重なった

第三十三問（後書き）

久遠はどうやって、2人を切ろうとしているのでしょうか？

第三十四問

ガチン!!
3つの音が重なり、
1人だけ立っていた

Aクラス	『Fクラス	影月久遠	総合科目	38点
高橋文史	総合科目	0点		
木下優子	総合科目	0点	』	

久遠だった

久遠は、まず高橋女史の胴体を腕輪のチカラで切断。その後、優子も切っていた

2人の攻撃を受けながらも残っていた久遠は奇跡だった・・・

「はあ、負けね。これで1勝1敗かあ」

「そうだね。またやろうね」

「そうね」

「影月君は強いですね。」

まさか、生徒に負けるとは思いませんでした。点数の面でも・・・

「あはは、なんか、必死で早く書く練習をやってたらとれたんですよ自分でびっくりです」

「また、勝負してもらえますか?」

「ええ、喜んでお受けします」

ぼくたちはお互いに握手を交わした

その時、

『『『わりに、あわね――!――!』』』

明久達は女子たちに勝つたみたいだけど何があつたのかな?

「影月君は行かないんですか?」

「ぼくは、2人と戦いたかっただけですからね。」

覗きには興味ありませんから

「木下さんがいるからですか？」

「え、それはーーーーー」

高橋先生に弄られた

その後、2年生全員は停学処分となつた

ぼくのことは西村先生が掛けあつてくれたみたいだけど
学園長がものすごく怒つていて、許されなかつたらしい

信じられないことが起こった

母さんが重い病気につかつた。

母さんはアメリカの病院で手術を受けることになり、明日にでも病院のへりで向かうことになった

ぼくは、その4日後にアメリカに行くこととなつた。

第三十四問（後書き）

後、3話ぐらいで完結です

第二十五問 「サヨナラ」 せぬわい（前書き）

第三十五回 「サヨナラ」はない

「優子、今から家に行つていいかな?」

『いいけど、急にどうしたのよ?』

「行つてから話すよ」

「分かつたわ」

優子 side

突然、久遠から電話が入り、家に行つていいか?って元気のない声で言つてきた
何かあつたのかしら?

優子 side out

ピンポーン

「あ、久遠上がつて」

「うん、おじやまします」

廊下を歩きリビングに着いた

「優子、秀くんとおばさん呼んできてくれるかな?」

「え？ うん、分かった」

優子は2階に上がつていった

「話つてなんなの？」

「うん、母さんがね、重い病気にかかつたんだ」

「えつ！？」

「・・・それで？」

優子と秀くんは驚いていた

優子のお母さんは驚いていたけど、話を最後まで黙つて聞くつもりらしい

「うん、今は、アメリカの病院で手術中だと思つ。
ぼくも火曜日にはアメリカに行く」

「・・・・・・」

三人は黙つてしまつた

「久遠・・・

久遠のお母さんと元氣で帰つてきなさいよーー！」

「うむ、また、一緒に旅行に行くのじやー！」

「そうね、また、あなた達と会えることを楽しみにしてるからね。
だから、1人で帰つてきぢやダメよー？」

「うん、みんなありがとう

それぢや、僕は帰るね

また、学校で

「「じゃあねー（のう）」」「

家に帰つた

優子 side

「優子、良く我慢したわね」

「だつて、ヒク今泣いたらヒク久遠が行かないじゃない」

また、久遠と放れることによつてアタシは涙を流して
いた

「そう、じゃあ、今はいっぱい泣いて、久遠ちゃんが帰つてくる頃

には笑顔がいられるようにならないとね

隣でも秀吉が泣いていた

まるで、昔のあの時みたいたつた
その後一晩中アタシは泣いた

優子 side out

月曜日

「失礼します」

「入りな」

ぼくは学園長室に来ていた。

「何でしようか?」

「アメリカに行くのかね?」

「ええ、母さんが病気ですから

明日にでも行きます」

「だつたら、仲が良かつた

AクラスやFクラスに別れの言葉ぐらう言つときな
時間は取つてあるから

「なんですか?」

「土曜日にアンタから電話かかつた時に

今日、授業する先生方がわざわざ開けてくれた

「そうですか・・・

「有り難く、時間を使わせてもらいますね」

「ふん、用件はそれだけさね」

「では、失礼します」

ぼくは重い足取りでFクラスへ向かつた

Fクラス前

「すいません、遅れました」

「ちょうどよかつた、影月。

クラスの奴らには俺から話しておいた。後はお前の言葉だけだ。

「はい」

ぼくは一人一人にお礼を述べたりしていた

「西村先生、短い間でしたがお世話になりました

いつも、元気で凄かったです」

「影月、お前のような生徒はあまりいなかつた

尊敬できるところだ

その心を忘れるなよ」

2年Fクラスの担任西村先生

最後は仲の良かつた明久達

「康太、短い間だけ、ありがとね」

「・・・・また、帰つてこい」

「うん」

ムツツリーこと康太

「島田さん、いつも元気だつたね
いつも、楽しかつたよ

それと、頑張つてね」

「ありがとね、影月、ウチもあんたと入れてよかつた
ツンデレ娘の島田さん

「姫路さん、初めてみた時、君がFクラスだつて信じられなかつたよ
でも、振り分け試験の時に明久に助けてもらつて良かつたね
あと、島田さんと一緒に頑張つてね」

「はい、影月君、元氣で

優子ちゃんも待つてますから

また、会いましょう」

天然少女の姫路さん

「雄二、君の奇策にはいつもびっくりさせられたよ
あと、ぼくが転校してきた頃、最初に話しかけてくれてありがと
う

「寂しくなるなー

ま、俺はお前の事は忘れても絶対思い出す
そんぐらい、お前はでかい存在だった。
ありがとな」

元神童の雄二

「明久、いつも、バカやつて楽しそうだつたね

そんな、君を見てぼくも楽しかったよ
あと、恋愛には鋭くなろうね」

「ハハ、分かったよ

元気でね。

久遠と遊んだ日々、忘れないから」

バカ代表の明久

「秀くん、ぼくの最初の友達は優子と3人だったね。
大分前の事が昨日のように思うよ。すごく楽しかったよ
あと、演劇頑張ってね

いつも、一緒に練習してて楽しかったよ

勉強も両立して、来年はAクラスに入りなよ。」

「さみしくなるのう

久遠と、いると、退屈しなかったのじや

いつも、演劇の練習を付き合つてくれてありがとの
お主のおかげで、自分の気付けなかつたことを言つてくれたのう
またな、親友！」

ぼくの大親友の秀吉

ぼくは、一人一人に挨拶を言い、Aクラスに向かつた

「失礼します。」

Aクラスの扉を開けると、高橋先生から話があつたのか、みんな驚いてこつちを向いていた

「影月君、早速ですがお願ひします」

「母さんが重い病氣にかかり、明日アメリカに行きます。

最後に仲良くさせてもらったAクラスの人たちに感謝の言葉を言いたいのでこの場を借りて言わせてもらいます。」

Fクラスの時と同じように一人一人に気持ちを伝えて行く

残るは三人

「工藤さん、君はいつも元気だったね。

後、下ネタは少し自重した方がいいよ」

「あははー、これがボクだからねえ

影月君も向こうで頑張ってね」

ボーイッシュ少女の工藤さん

「雄一は素直じゃないから、苦労するかと思つけど、雄一は絶対霧島さんの事が好きだからね

がんばりなよ?」

「・・・・・寂しくなる。

影月はいい人だからアメリカでも大丈夫。頑張つて

学年主席、雄一の嫁の霧島さん

「優子、今まで僕のそばにいてくれてありがとう。

それと、『サヨナラ』は言わない。

また、母さんと一緒に帰つてくるから。」

「うん、また元気な顔見せてね。

久遠は約束を破らないから、ずっと信じてる」

最愛の人の優子

ぼくは大切な人たちに見送られながら、日本を旅立つた

第三十五問　『サヨナラ』は言わない（後書き）

感想など待っています

第三十六問 帰還（前書き）

久遠がかえつてきましたー

第三十六問 帰還

1年後 夏

「久しぶりだな~」

あの日から一年と一ヶ月ぐらい過ぎて、ぼくと母さんは帰ってきた
母さんの病気も完治した。

「そうねえ、久遠には迷惑をかけてごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。」

それにまた母さんと帰つてこれでよかつたよ

「あ、そうだ

久遠、文月に転入にしておいたわ

「ホント!?

ありがとう」

ぼくの転入先も文月学園となつた

「明日から行けることになつてるから」

「うん、分かった

明久 side

「ねえ、雄二」

「なんだ？」

「あれから一年以上経つんだね
久遠、元気にしてるかな？」

「あいつの事だからうまくやつてんだろ。
メールこねえのか？」

「全然、こないよ

秀吉も雄二の作戦の時に携帯壊してからは、買つてないって言う
し」

「ふうん、ま、大丈夫だろ」

朝の時間で僕と雄二は一年前にいなくなつた友人の事を話していた

キーンコーンカーン

チャイムから遅れること5分、鉄人が入ってきた

「突然だが転校生だ
入つてこい」

「はい」

なんか聞いたことあるような声だった

そして、ドアを開けて入ってきたのは
久遠だった

時間は少しさかのぼり

「うわあ、久しぶりだなー」

「影月、久しぶりだな」

前には西村先生がいた

「お久しぶりです。

元気でしたか?」

「胃潰瘍にかかるかと思ったぞ」

「あははー」

苦笑いしかできなかつた

「ぼくってまたFクラスですか?」

「いや、学園長がお前だからAクラスでいいと言つてな

お前はAクラスだ」

「誰がいますか?」

「お前の知り合い全員だ」

「明久達もですか!?」

「ああ、あのバカ達もAクラスになるため、必死に勉強したらしい
おかげで俺はAクラスの副担任になつた。」

話を聞く限り、Aクラスは明久、雄一に康太、秀くんもいるらしい
みんながんばつたんだね

「立ち話をしそぎたな、Aクラスに行くか
「はい」

Aクラスへと向かつた

「入れ」

「はい」

Aクラスに入った

そこには見知った顔がたくさんいた

木下姉弟、明久、雄二、康太、霧島さん、姫路さん、島田さん、工藤さん

「「「「「「久遠（影月（君））」「」「」「」「」「」「」」」」

みんなが声を上げた

「影月、挨拶を頼む」

「はい、えつと、みんな久しづり

影月久遠です。あと少しの間だけどよろしく

優子の口がぽかんと開いていた。

ぼくの席は優子の後ろだった

最終問題

休み時間

「「「「「久遠（影月（君））……」」」」」」

「うわっ！－！－

な、なにかな？」

「いつ」

「かえって」

「きたのじや？」

連携をとつた3人

上から雄二、明久、秀くん

「えつと、昨日帰ってきたよ」

「・・・・なんで連絡入れなかつた？」

これは康太

「忘れてた」

「「帰つてくるなら帰つてくるつて言いなさいよ（言つてください）

！」」

島田さんと姫路さん

そこまで怒らなくていいと思つよ

「あははー、影月君も大変だね」

「・・・・優子も大変」

労いの言葉有難うござります。

「久遠！」

「は、はい！……？」

突然優子に大声で呼ばれびっくりした

「帰つてくるなら言つてよー！

空港に迎えに行つたのに……」

「そこはほら！

驚かしたくならない？」

「……いや、絶対にならない」「」「」「

全員に否定されました

「まあ、とりあえず

久遠、おかえりなさい」

「うん！ただいま」

こうして、ぼく達はまた進み始めた

毎日が楽しくて

時が進むのは早かつた

もし、生まれてぐる頃が違うかつたら、君達と話すことはなかつた

だろう
もし、ぼくが君たちと会えてなかつたら今のように笑えてなかつた
だろう
もし、誰かが欠けていたらみんなと会えていなかつただろう

もし、ぼくの大切な親友がいなかつたら、ぼくは友達は少なかつた
だろう
もし、ぼくの大切な彼女がいなかつたら・・・・・・・・

この世界は凄くつまらないもの

だろう

ぼくと友達、親友、彼女を出会わせてくれた
神様に改めて感謝できます

{ 完 }

最終問題（後書き）

ついに終わりました

ご愛読ありがとうございました

まだ連載している方もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3049w/>

ぼくとFクラスと召喚獣

2011年11月7日19時14分発行